

私の半世紀の記録

麻島 昭一

1. 中学時代 (1943-1948)

- (1) 中学時代の軍事教練 (東京府立十七中)
- (2) 学徒動員 — 大日本機械、大日本兵器
- (3) 戦後の中学時代

2. 浦高時代 (1948-1949)

- (1) 武原寮での生活 — 体操部への入部、授業、国会陳情
- (2) 東大入試 — 浦高の行くへ、変則入試、教養学部へ入学

3. 東大時代 (1949-1953)

- (1) 駒場時代 — 駒場寮にもぐりて入寮、アルバイトに精を出す、駒場での授業ボイコット
- (2) 本郷進学 — 経済学部を志望、柳川ゼミに参加、卒論、他学部の聴講、先輩の影響

4. 社会人時代 (1953-1977)

- (1) 就職 — 新制・旧制の同時卒業、住友信託に入社
- (2) 大阪勤務の半年間
- (3) 長い審査・調査畑 — ①東京支店預金課、②東京審査部に転勤、③企業の格付け、
④海外出張 — 第三次信託視察団、日本イラク石油
- (4) 研究活動 — ①辞典の原稿執筆、②信託業史の開始、③学会への入会、④諸研究会への参加、⑤滋賀県金融史の開始、⑥専修大学で「信託論」担当、⑦東大で「経済学博士」を取得、⑧『住友信託銀行五十年史』の編纂

5. 専修大学時代 (1977-2000)

- (1) 転職の経緯
- (2) 入職した最初の教授会の印象
- (3) 学内の活動 — ①経営研究所長、②社会科学研究所長、③大学院経営学研究科長
- (4) 学外の活動 — ①大蔵省金融制度調査会専門委員、②日本学術会議第15期会員、
③文部省教科用図書検定調査審議会委員
- (5) 研究活動 — ①財閥史研究、②日本金融立法史研究会、③日本金融論研究会、④信託業史研究の続行、⑤社史の監修・執筆、⑥学界動向・文献目録作成の奨め

6. 全体を回顧して — 研究者としての成果

◆司会 それではヒアリングを始めます。

◆麻島 内容に入る前に一言申し上げますが、私がヒアリングの対象となったのは、社研の所長経験者としてかなと思います。これまで慣例として経済学部所属の先輩がヒアリングの対象となってきましたが、他学部の者でやった者はいない。これまでの先輩と比較して、私の場合は学問の変遷にはなりそうにないので、最初は辞退と思いましたが、慣例を破るのも悪くはないし（むしろ後の人がやり易くなる）、企業から学者に転身したケースを語っておくのも何かに役立つと思直した次第です。また私の研究分野が随分と拡散し、いわば多角経営をしています、その経過を自分で説明しておくのも必要かも知れない。それで私の平凡な中学以前は切り捨てて、以後50年の軌跡を辿らせていただくことにしたいと思います。

1. 中学時代（1943－1948）

(1) 中学時代の軍事教練

◆司会 どこで生まれ、小学生時代をどこで過ごされたかについても一言お願いします。

◆麻島 私は、1931（昭和6）年3月11日、東京の浅草というところで、下町生まれなんです。親の仕事のために小学校の1年から3年までは岡山市の小学校に行ってますけれども、それ以外はずっと東京生まれ、東京育ちということで、下町っ子ということになります。

物心ついてからの話は省略し、中学からのことですが、1942（昭和17）年に府立17中という、ナンバーはついていますが、かなり遅い方のナンバーのところに入りました。このころは中学の増設時代だったものですから、いわゆる1中から始まって10中ぐらまではあったようですけど、急に増設して24中まで作ってしまったんですね。そういう中で私は入りやすいということで17番目、当時7中というのがありましてね、今は墨田川と言っていますけれど、それと併設校でした。中学を増設しても建物がないから、何中は何中へ居候というわけで、みんなペアで新設されました。だから私は下町なものですから、隅田川のそばの向島にあった7中に行っ、そこで17中の生徒として生活しました。

◆質問 中学時代は太平洋戦争の最中ですが、当時の思い出で印象に残ることは？

◆麻島 中学時代で強烈な思い出は何といっても軍事教練ですね。1年の時から、入った途端からやらされるわけで、やはり勉強以外の軍事教練でいろいろとやらされた記憶が今でもあります。そういう中で特に印象的だったのは、査閲です。それぞれの中学に配属将校というのが決まっていて、予備役になった将校なんでしょうけれども、その配属将校が全体をとりまとめて、軍事教練をどれだけきちっとやっているかを、中央から見に来る、それを査閲というんですね。それに備えて、日ごろ一生懸命教練をさせられる。

なぜそんなことが印象的かというと、査閲は全校の行事になっていますから、先生方が級長

の代わりに小隊長をやるんですね。もちろんクラスごとに級長がいて、ふだんはそれが小隊長をやっているんです。3クラスしかないものですから、3クラス全体を中隊とみなしていたんです。それが、査閲の時には佐官級の将校がやってきて、その前で分列行進といって、みんな揃ってイチ、ニ、イチ、ニと行進をするわけです。ところがそういう査閲とかの公式行事の時は、先生方が小隊長とか中隊長役をやる。それは、まあそれで良いんですけども、私の担任は漢文の先生で、当時もう60近かったかな、人格者で古武士のようなお爺さんでしたが、そういう先生でもやらされて、はたから見ていて子供心に「大変だなあ、先生も。こんなことをやらされて」と思いましたね。日ごろは自分の教科だけをやればいいものを、子どもと混ぜてね、そういう査閲の時には配属将校に怒鳴られ、上級将校の前で査閲をやらされる。どんな気持ちかなと、老先生の悲哀みたいなものをね、子供心に感じましたね。

軍事教練は教科の一つですが、軍人勅諭の暗記や小銃の手入れや射撃だけでなく、俵を担いで駆けっこをやらされたり、大きな障害物を乗り越えるのをやったりしました。私は中学の時、身体が小さくて、50人のクラスでね、前から数えて4、5番目なんですよ。大きい人は大人みただけで、私は小さかったから、体力ではハンディキャップがありましたね。障害物をよじ登るとか、重い物を担いで走るの辛かったという思いがあります。そして時には兵舎に泊まり込みでね、合宿演習をさせられちゃうわけですよ、軍事教練の一環としてね。野外で二軍に分かれて演習をさせられて、いろいろと軍隊もどきのことをやりました。千葉に滝河原廠舎という兵舎がありましてね、先生ともども全員がそこで寝起きして、軍事教練の大演習をやる。そういうのがね、1年の時からありましたね。

そういう中で私は級長だったものですから、いつも小隊長の役をさせられたり、査閲の練習のときは中隊長役をやって、全クラスに号令をかけたりました。だから普通の人は銃を持ったり、木銃を持ったりするんですけど、私はサーベルを下げ、指揮刀というんですけどね、それで分列行進するわけです。でも小さいですから、サーベルが地面に引きずっちゃうんでね、それを手で持ち上げながら一生懸命行進したという思い出があります。

それで中学の時は、身体の鍛錬をよくやらされました。軍事教練の関係で、行軍というのがありまして、全校生徒が4列縦隊を組んで、肅々と歩かされる。今でいう高尾ですね、そのころは浅川っていうんですが、浅川から明治神宮まで、夜通し歩かされました。相当な距離ですね、約30kmはあるでしょう。まあ、くたびれました。

それからまた、1万メートルマラソンというのをチーム編成でやらされて、これもきつかったですね。小さかった私にとっては、たいへん苦しかったけれども、その代わりに小学校の時までは、ルンゲ（結核）の初期をやって病弱だったんですけど、中学へ行ったらどっかへすっ飛んじゃってね、たいへん丈夫になったんですよ。いわゆる乾布摩擦っていう、裸になって身

体をこするのを毎朝朝礼でやらされますからね、風邪もひかない丈夫な子になっちゃったんです。だから私にとっては小学校と中学とでは、かなりセパレートした体験ということになるわけです。

◆質問 軍事教練のお陰で、先生の頑丈な体が作られたのですね。勉強の面で何か印象に残ることはありませんか。

◆麻島 そのころの中学の勉強面で非常に強く印象に残っていることは、歴史担当に西山先生という方がいましてね。眼鏡をかけて、割合しっかりした先生で、熱心に子どもたちに語りかけてくる……。その頃の私は「熱心な先生だな。この歴史の先生は尊敬に値する」と、ずっとそう思っていたんですね。ところが戦後になっていろいろと分かってきたら、何とそれはね、平泉一派の皇国史観だったんですね。だから、そういう歴史だったのを子どもの頃は分からなかったですね。ただもう、その先生の熱心さとか、人格的に優れていそうに見えたから、そっちが頭にあって、教わったことは軍国少年にとって、別に違和感なくちゃんと聞いていたわけですね、その頃は。

もう一つは国語に椎野先生という人がいました。江戸文学をやっている先生でしたが、その頃は分からなかったけれど、あとから聞くと東大の大学院生だったんですね。それが教えにきていたんです。江戸文学はもちろん、中学の授業ですからやりませんがね、国語をやっていた。なぜこれが問題になるかという、この先生が、私も成人して別のところで会った時に、「君、知っていたか。西山先生っていうのは、あれ皇国史観だったんだぞ」と教えてくれたので、「ああ、そうか」と初めて思い当たったわけです。この椎野先生とは、最近亡くなるまで年賀状をやりとりしていましたが、江戸文学をやっているけれど、戦争に批判的な人だったんですね。あとで椎野先生は弘前大学の教授になりましたが、私と意外なところでぱったりと会ってしまうという、エピソードが後に出てきます。

(2) 学徒動員—大日本機械・大日本兵器

◆質問 空襲や疎開の経験はいかがでした。

◆麻島 実は私たちの年代は、もう中学の1年から学徒動員されていたんですね。ですから「私が中学をまともにやっていたら、もうちょっと立派な学者になったかも知れないけど、君たちと違って勉強できなかったんだ」と、学生たちによく言うんです。1年の時から郊外へ動員されて開墾作業したり、疎開家屋を壊す作業をやったりしました。2年になったら、俄然今度は工場動員になっちゃったんです。どこに行かされたかという下町で、あれは今で言うと、大島ですかね。押上のもっと先ですか、そこに大日本機械という会社がありましてね、自転車のタイヤを作っている工場なんです。そこに動員されて朝から晩まで、勉強はもう全然しないで、タイヤばかり作っていた。そのタイヤがなんとノーパンクのタイヤなんですね。いわ

ゆる銀輪部隊、戦争初期にマレー半島を南下して行くという自転車部隊、それに使われたノーパンクタイヤでした。

◆質問 ノーパンクというのはチューブレスのことですか？

◆麻島 チューブレスですね。チューブの代わりにスポンジを巻き込んで、タイヤにするわけなんです。だから私は自転車のタイヤとか自動車のタイヤとかの作り方は詳しいんです。その製法は全部やったんですよ。

その工場が爆撃で焼けましたから、働く場所が無くなっちゃった。それで、もうおしまいかと思ったら、さすがにすぐ別なところを学校の方で探したらしくて、次に行ったのが大日本兵器という工場です。その間に私の家は、3月10日の空襲と5月27日の空襲で、2回焼け出されて、ずいぶん辛い思いをさせられました。空襲の時は防空壕から出て見ていると、B29がこっちへ来るのが分りますから、「ああ、来るな」と思ったら、ほんとにバラバラって焼夷弾が落ちて来て、まわりが火の海になってしまった。そこを逃げ惑って、家が浅草なもんですから、言問橋までやっと母親とたどり着いて、隅田川の水をかぶりながらやっと生き延びました。まあそういう体験をしているから、いわゆる焼け焦げた死体はいやというほど見ているんです。

空襲にやられて家は無くなっちゃったけれど、今度は大日本兵器に動員されて寄宿舎に入れられました。今の湘南富岡にありまして、これが海軍の指定工場でした。そこでは20ミリの機関砲……、ゼロ戦に搭載するものなんですけど、それを作っていた軍需工場だったんです。工場の敷地の中の寄宿舎に入れられちゃって、朝から晩まで働かされました。その時、私にフライス盤という工作機械があてがわれて、これで一生懸命銃身を削りました。フライス盤には一定の高さがありますが、私は背が低いからみかん箱を置かないと、届かないんです。だからみかん箱の上に立って銃身を削るんですけど、やっぱり素人ですから、よくカッター（切削工具）を壊す。無理して削るとカッターに余計な力が掛かって壊れちゃうんです。そのカッターを貰いにいくと怒鳴られて、「また、壊したのか」ってよく叱られましたね。「すみません」って言いながら貰ってきてまた削る。一日中、立ってやっていると、足が大根みたいに太くなっちゃうんですね。やっぱり一日、立ちっぱなしというのは辛かったですね。

そういうところで、食べるものもまともに無くて、ひじきだとか大豆を混ぜたようなご飯を寄宿舎で食べさせられて、それで朝から晩まで働いて、挙げ句の果てに大空襲が何度も来ました。われわれは防空壕に避難できたんですけども、派遣された海軍の兵隊なんかはB29がいなくなるとすぐ外へ出て行って、いろいろ片づけしたら、そこをすぐ後続部隊に爆撃されてね、海軍の兵隊がずいぶん死にました。工場の前を京浜急行が走っているんですが、爆撃でその線路がズタズタになってしまうとか、かなり怖い思いをしました。

しかし、20ミリの機関砲を作っていたお陰で、またフライス盤をやったお陰で、工場の中の

工作機械をずいぶん憶えました。後になって今度は仕事の上で工場はずいぶん見ましたが、その時の記憶が生きていますね。傑作なことがあります。私が銀行の調査部にいて、この大日本兵器を資金のために調査しました。戦後は日平産業と名前を変えたんですが、その工場へ行って専務に会っていろいろ話を聞いている時に、「実は私、昔この工場にいたことがあるんですよ」と言ったら、向こうがびっくりしましてね、「どうして?……」「いやいや、まあ、それはどうでもいいですが、工場をちょっと見たいから」ということで、案内して貰ったら、昔いた工場がそのまま残っているんです。「この工作機械」と断定まではできないけど、私のフライス盤に似たような古いやつがあるんですね。だから「これは昔からあった機械じゃないですか」というと、「よくご存じですね、そうです、昔から使っていますよ」「だって、もうずいぶん時間が経っていますから、これじゃ精度が出ないでしょう」「いや、自動車の部品ぐらいだったら、これで十分、間に合うんです。やっぱり外国製の良い機械だから使えるものがずいぶんあるんです。」なんて、そういう話をずいぶん聞かされて、「実は、私はここで学徒動員で働かされていたんです」という話をしたら向こうはびっくりしましてね。「その時に鬼工場長でね。まあ、すごい怖いガミガミいう工場長がいたんですけど、どうなりましたか。」って聞いたら、「いやあ、あの人戦争が終わってから、ついに発狂して、死にました」「ああ、やっぱり」って、そういう面白い落ちがつくんです。

戦争が終わったのは中学3年の時ですから、まあ、学徒動員でずいぶん時間的にスポイルされたという気がします。戦争中、配属将校などは、われわれ生徒たちに対して軍の学校を勧めるんですね。海兵へ行け、あるいは陸士へ行け、あるいは何とかへ行けて、私も幸か不幸か成績は良かったものですから、ずいぶん勧められました。その頃すでに近眼でしたから、どう考えても陸士や海兵に通るわけがないんですね。そしたら、じゃあ海軍機関学校とか主計学校（陸軍なら経理学校?）が良いだろうとか、勧められましたが、何とかか何とか言っているうちに戦争が終わったから良かったんです。

それで中学3年の時に、さすがに大日本兵器は危険があったものですから、親が心配して迎えにきて、大急ぎで群馬県に疎開しました。渋川中学にちょっといて、すぐ敗戦になった。

(3) 戦後の中学時代

◆質問 戦後の中学生活はどんな状況だったのですか。

◆麻島 敗戦の年の12月に母が疎開先で病死して、それでまた東京に戻ってきて、もとの学校に復学という形で入りました。戦後ですから新しい教科書がまだなくて、前の教科書を一生懸命、墨で塗り潰しました。戦時色の表現が教科書に書かれているから、何頁の何行目から何行目は墨で塗って……。要するに新しい教科書は作れないですから、いわゆる教科書の抹消というのを経験して、やっぱり時代は変わったんだなというのが一つある。同時に先生たちが、戦

争中は配属将校もいたし、いやだったかも知れないけれど、やっぱり軍国主義の時代だからそれにふさわしいことを言っていたのに、戦後になるとコロッと変わった。急にこんどは民主主義がどうかこうとか言うのを聞かされると、不信感が生まれましたね。そうなると今までの軍国少年が、だんだん目覚めてきたというか、何か変な感じがする。先生っていうのも、どうしてこんなに変わっちゃうのか……、まあそういうことを思いましたね。

戦後の食料のない時代ですから、食うや食わずの生活の中で中学へ行ったわけですが、中学でも戦争が終わると、今度は自治会を作らなきゃいけないっていうことになりました。私は級長をやっていたせいか、ついに捕まって全校の初代自治会長をさせられたんです。講堂に全生徒を集めて、何か言わないといけないっていうわけで、もうほんとうに足がすくみましたね。おおぜいの前で、何か言わされるなんて、夢にも思っていなかった。後から思えばそれは良い経験だったかも知れません。

◆質問 中学を卒業して高校に進学するわけですが、受験勉強と浦高を選んだ経緯をお聞かせ下さい。

◆麻島 そういう新しい動きの中で、当然受験勉強が出てくるわけです。当時は予備校なんてありませんから、受験参考書を買って、ひたすら自分なりに勉強しました。夜こたつに入ったままうたた寝をして、真夜中目を覚ましてそのまま勉強するとか、時にはちょっと深夜のラジオを聴くとかしましたね。それでどこを受けるか、先輩からもいろいろ話を聞かされて、ひとつ一高を受けて見ようか、ということで一高を受けたんです、4年の時は。自分では入るかな、と思ったんだけど、だめだったですね。この頃は4修という制度があって、普通は5年で卒業するんですけど、4年からでも行かれる。

◆質問 飛び級みたいな？

◆麻島 まあ、そうですね。中学5年を全部やらなくても、4年で入っちゃう人がいるんですね。私も4年で合格していれば、1年得したわけだけど、だめだったから通常の5年で、高校をもう一度受験した。学制が変わるので、旧制高校受験の最後のチャンスだから、安全をみて浦高にしたんです。その時、私立の高校も受けられるものですから、武蔵を受けたり、それから都立高校（今の都立大学）、それから早稲田の高等学院とか、そういうのは一通り受けて合格した。今私は武蔵大学で非常勤講師をやっているんですが、この時入学してそのまま進めば、武蔵大学の1期生になっていたかも知れないんです。今度は自分が教える立場で武蔵へ行ってみて、昔の受験した校舎がそのまま残っているんで非常に懐かしく、まあ武蔵でも良かったんじゃないかなと思いました。ただし私は貧乏人だったから、私立は力試しに受けているだけで、やはり月謝の安い官立が、最初からの本命だったんです。

◆質問 当時は、高校を1校しか受けられなかったんですか？

◆麻島 そうです。官立は一つです。あとは私立。みんなバンカラで、マント着て白線帽かぶって、下駄で歩いているという点では、官立も私立も似たようなものですね。3クラス1学年で、旧制高校へ行ったのは二人だけ、一橋予科や東工大予科、早稲田高等学院などが数人いましかね。

2. 浦高時代（1948-9）

(1) 武原寮の生活

（授業など）

◆質問 浦和高校の生活はどんなものでしたか。

◆麻島 私の浦高時代は変則で、高校3年の筈なのに1年しかいなかった年代なんです。浦高では、私は文科甲類、略して文甲っていうんですが、文甲は第一外国語が英語、第二外国語は自分で好きなものを選べる。と言ってもドイツ語かフランス語ですけど。文乙がドイツ語が第一外国語で、第二外国語が英語。文丙はフランス語が第一外国語で、第二外国語が英語というわけです。

文甲が40人、文乙、文丙は20人ずつという編成で、文科だけで80人しかいないんです。戦争中の名残で、理科が多くて160人もいて4クラスある。文科は2クラスしかない。浦高だけでなく、ナンバーがない旧制高校は、だいたいそういう編成でした。一高だけは400人いるんですよ。文科200人と理科200人、文科も甲、乙、丙、丁、戊まであって、特別でしたね。

浦高に入る時は、とても倍率も高くて、十何倍でしたか、幸いに合格しました。それまでは全寮制が建前だったんですが、食料不足の時代ですから、全部寮に入れると食料の供給が大変なんです。だから家から通いたい奴は家から通ってもよろしいということになったんです。ですから私の学年は寮に入った奴と自宅から通学する奴と、分かれてしまいましたけど、私はやはり高等学校だったら寮に入らなくちゃ面白くないと思って、最初から入るつもりでした。

◆質問 寮があったのは今の埼玉大学があるところですか。

◆麻島 いいえ。浦和と言っても北浦和という駅がありましてね。北浦和の駅から歩いて2～3分、目の前に正門がありました。そこがキャンパスですけども、戦災でほとんどの校舎が焼けて無くなっていました。残っているのは6つの寮と生物教室と、あとちょっとした建物だけ。寮はあっても勉強する場所が無いので、そこから数分離れた場所にある埼玉県内の宿舎を改造して、それを教室と寮の補充に当てていました。木造の宿舎を改造した教室ですから、朴歯でどかどか歩くと床が抜ける。住宅不足の時代ですから、教室に続いたところの部屋に先生が住んでいる。授業中に先生の子が教室にやってきてしまう、奥さんに逃げられたから子供が部屋で待っていられなくて教室に来てしまうんだという噂でしたが、先生はそそくさと授業を切

り上げて、子供の手を引いて部屋に帰っていく、そういう光景もありましたね。そしてよくやったのが「代返」です。欠席の者から頼まれて、先生が出席をとる時に、本人の代わりに返事をしてやる。何人も頼まれると、自分と頼まれた分だけ声色を変えなければならない。先生も分かっているながら見逃してくれる。幾人もやるのは難しいですね。

(体操部へ入部)

それです。寮生活といえば、各寮の中に部があって、文芸部とか哲学部とかそういう文科系から始まって運動部もいっぱいあるわけですね。そのときに、私はなんと体操部というのに入ったんです。みんな不思議に思うんですね。入学式で勧誘がいっぱいありまして、いろいろ聞いていると、いわゆる体育系の運動そのものが売り物になっている、これはすぐ分かります。しかし自分にとって体操は身体を鍛えるのには良いかも知れないな、という気持ちの一つと、「いやあ、体操部っていうのは身体を鍛えるんじゃなくて、中でいろいろ議論して面白いところだ」って、勧誘でうまいことを言うんです。それに引っかけ、「そうか、体操よりも議論の方が面白そうだな」と思って入ったのが運の尽き。デンマーク体操をやらされたり、マットの体操をやらされたり、いろいろやりましたけれど、結構身体を鍛えるのには良かったですね。ですから私もその1年間のうちには空中転回できるようになったし、いくつかの運動もやるようになったんです。

一方では確かに運動もやったけれども、謳い文句のように体操部の中ではずいぶん議論も聞きました。当時は左翼が元気で、すでに寮の中では共産党の細胞もあったりするわけですから、いろいろとみんな洗脳されましたね。中学まではまったく優等生的で、思想的なことには関係なかったのが、急にいろんなことを言われて、大混乱しながら一生懸命聞きました。まだ純真ですからね。

同じ部の中で、原田勝正という人が1年先輩でいましたし(今は和光大学教授)、それから杉山和雄君は文乙ですが同級生。彼は成蹊から東洋英和へ行行って、経営史をやっています。原田さんは1年上だけど、さっきの四修で浦高に入っているから実質的には同学年です。しかし浦高では1年上は絶対1年上なんですね。これはもう絶対の差になっちゃうわけです。ですから今でも本当は同学年のはずですが、「さん」をつけて呼ばなくてはならないんです。その他にもう一人川村善二郎という先輩がいて、私が体操部に入った時は、東大文学部の学生で、丁度入れ替わりでした。この川村さんと原田さんが、あとでたびたび出てきますけれど、ずーと付き合ったり、世話になったり、私はいろんな面で恩恵をこうむっている良い人たちです。また、杉山君がまさか後になって同業者になるとは夢にも思わなかったですね。二人とも全然進路を異にしながら、最後は同じ分野の経営史に落ち着いてしまった。経済関係で上原信博さんという静岡大学の有名な人がいるんですけど、それもやっぱり体操部の先輩ですが、あとで

分かっただけで話したことはありません。

◆質問 原田先生も体操部だったんですか？

◆麻島 そうです。川村さんも杉山君もみんな体操部だったんです。寮生活で傑作なのは、食料不足の時代でしたから、誰かがお米を家から持って来ると、自分の部屋で夜なんか飯盒で炊く、あちこちで炊くものですから、寮全体のヒューズが飛ぶんですね。真っ暗になっちゃうんです。そうするとそれを直すのが厚生部で、停電になると「おい、厚生部、早くヒューズ入れろ」なんて、どこかで怒鳴るんですよ、真っ暗の中で。そうすると「おー」なんて言って、一生懸命誰かが直してくれるんですね。そうすると電気がつく。暫くするとまたヒューズが飛ぶ、そういうことの繰り返しでした。厚生部の同級生に吉川勇一君が居ましてね、彼は平平連の事務局長やっていた有名な男で私も尊敬していますが、彼なんかは一生懸命やってくれましたね。
(食糧不足)

それから食糧不足の寮は当時カード制でした。1カ月分のカードに、毎日朝昼晩と3つの欄があって、食堂で朝食べるとはんこハンコ押され、昼行くとまた押されてということですね。でも一食では足りないんですね、量が。第一出てくるものが、金属製のボールの中にご飯を入れてくれますが、量を増やそうしていろんな混ぜ物があるんですよ。豆粕が入ってみたり大豆が入ったりね、ヒジキはその時はなかったかな、あれは動員の時だったな、だからそういう食事では、お腹は一杯にならないし、出てくるおかずも、切干大根と人参、それに油揚げ入れたもの、そんな物しか出てこない。時にはコッパンが一つしか出てこないとか、あるいはサツマイモが2本出ておしまいとかね。そういう寮生活ですから、ツヴァイって言って、1回で2食食べちゃうわけですよ。そうするとハンコ2つ押されますから、1カ月のうち途中までで押す欄がなくなる。食べられませんから、そういう奴は仕方がない、家に帰って何か貰ってくるとか、何か別のことをしなければいけない。

その頃のわれわれの風俗というのは、胸のポケットには箸とスプーンをいつも入れている。寮の誰かの部屋に行って、なにか食べるものがあったら、即座にその箸で食わないと喰い損なう。だから何処へでもスプーンと箸だけは持って歩いてた、そういう年代だったですね。

もう一つ面白かったのは、武原寮子爵とかいうのが居ましてね、どうしてこれ華族なのかなと最初思ったんですよ。そうしたら1回落第すると男爵になる、2回落第すると子爵になる。3回落第するとついに放校になっちゃいますから、さすがに伯爵ってのは居ないんです。寮生大会があると、そういう人が発言する時には、「武原寮子爵なんのなにがし」と名乗るんですね。最初は元貴族の奴が先輩に居るんだなと思ったら、全然そうじゃなくて、要するにダブった、ドッペったというのは尊敬されるんですね。あいつにはドッペるだけの理由があると、つまり勉強はそっちのけで自分の好きな哲学をやっていると、あるいは文学をやっていると、

みんなからはむしろ立派な奴だと思われているし、本人もそう思ってやってるから世話無いわけですね。そういうのが何人かいましたね。面白いといえば、「逆突コンパ」というのが有ったんです。寮生活していますから、みんな成績なんかは分かっちゃうんですよ。成績は1学期終わると全部張り出されます。クラス毎に名前と科目が全部張り出されて、点数はないけれども駄目な科目は赤い丸が押されるから、誰はどの科目を落とすと全部分かっちゃう。最後の欄に全員の席次が出ている。それが全学年一斉に張り出されるから、みんな見え見えですね。

発表になると寮にいる奴は、各部毎に学年に関係なく全員でコンパをやる。体操部なら体操部でコンパやる。その時にいつもと違って「逆突コンパ」をやるんです。どういう意味かというと、一番どん尻の、一番成績の悪い奴がその時だけは威張って正面の席に座る。成績の悪い順に座って、一番いい奴は末席に行って、サービスをしなければいけないというユーモラスなコンパなんです。そういう茶目っ気が面白いなと思いましたね。お陰様で私は浦高の時もトップか二番目くらいだったから、一番サービスをさせられたことで強烈な印象が残っているんです。

しかし飯が満腹に食えないでも、まあ白線帽かぶってマント着て、朴歯の下駄はいてあちこち何処へでも行っちゃうんで、靴というのは浦高時代は全然履かなかったですね、ほんと。そういう生活でもわれわれにはいい思い出になっています。

住んでいた寮は古くさい、木造の寮ですけれども、壁に落書きがいっぱいある。哲学的とか文学的とか、左翼のアピールとかいろいろあって、なかなか含蓄深いものも随分ある。寮を壊した時には落書きだけは保存しておきたかった位ですね。

寮は一階と二階入れ替え制でして、二階の部屋のベランダに立つと、普通だったら落ちないように手もたれがありますよね、それが無いんです、燃しちゃって。そこに布団干して、昼間なんかは日向ぼっこや昼寝をするんです。聞いた話ですが、ある先輩が昼寝をしていて寝返りを打ったら布団と一緒に落ちた、その時に彼は自分と布団とどちらが先に地面に着くか思索したとか。

(国会陳情－授業料反対闘争)

◆質問 今では考えられない面白い寮生活だったんですね。寮生活以外での思い出はありますか。

◆麻島 そうですね、浦高時代にもう一つだけイメージがあるのが、自治委員でした。私はアイウエオの「ア」なもんですから、自治会のクラス委員にされてしまいました。当時、授業料反対闘争というのがありましてね、国立の大学や高校の授業料を一気に3倍に引き上げると。私はその時400円の授業料が1200円になったと思っていましたが、ある人から金額が違うと云われました。とにかく授業料をそんなに上げられちゃ大変だ、反対だってんで、自治会で国会

に陳情に行くことになった。各学校の自治会が総動員されて陳情に行くんですが、私も自治委員だから行くのが役目。それで国会に行って各会派を歴訪して陳情するわけですが、そんな時靴がありませんからね、私は下駄で行ったんです。さすがに守衛にそれは脱いでくれって言われました。しょうがないから赤絨毯の上を朴菌ぶら下げて、はだしであちこち回りました。あれが初めて議会に入って、いろんな会派を回った経験でしたが、その後も行きたいと思ったけど、まだ行っていません。国会の何委員会だったか分かりませんが、学生達も詰めかけて後ろの方で傍聴したんです。そしたら「麻島」って呼ぶ奴が居たんですね。誰かと思って見たら、冒頭でお話した椎野先生、江戸文学をやっていた先生が居るんですよ。「おまえ何でこんなところ来てんだ」と言うから、「いや私は今自治会の委員で来てんです、先生こそどうしたんですか」と聞いたら「俺は教員組合で来てんだ」というんですね。「とんだ所で会ったな」ということになって大笑いしました。

(2) 東大入試

◆質問 浦高から東大に進学されるわけですが、卒業されて進学となったのですか。

◆麻島 いいえ、そうじゃないんです。当時、学制の改革時代で六三三四制にするという時だったんですね。ですから旧制と新制とがちょうど境目になってる。だから私は旧制で浦高に入ったけれども、一年間だけでおっぼり出される運命になってしまった。

さっき言った私より一年早く入った原田さんは、中学4年修了で入ってるから浦高を3年やって大学へ行く、私は5年卒業で浦高1年だけやって大学へ行く、後で触れますが、大学の卒業は同じ年になる。私の方はそういう残念な年代だったんです。

東大が新発足する時、東京周辺の一高と浦高と東京高等学校、この三つの高校は一括されて東大の教養学部になる、という話がずいぶん進んでいました。だからわれわれはどうせ横滑りで東大に行けるわいと思ってたら、その話は壊れてしまっね。結局一高のキャンパスだけが教養学部のキャンパスになりました。東高の場合は戦災で何にもない、浦高の場合、校舎は戦災受けてるけど寮は残ってる、それから研究室があったらしいんですね。そういう物を使うから浦高は合併される側に回るだろうと、そういう説が多かったんですけども、いろいろな経緯がありまして、最後は三つの高等学校は一応全部ご破算、校舎だけは一高の校舎を使う、そういうことで最終決定されたんです。ですからわれわれはまた試験を受けることになりましたが、それが1年が終わる1月か2月頃に分かったから、猛勉強を開始しなければいけない。ところが準備が間に合わなくて新制大学の発足は7月だったんですね。だから変則事態になって、4月から7月までわれわれ全国一斉に浪人です、身分的にはね。6月くらいに試験やったと思うんですけど、7月に開講したらすぐに夏休みになってしまった。

入試のためにはやっぱり勉強しなければいけないんですが、家に帰っても仕様がなから寮

に居させてくれということで、4月以降も数十人居たかな、寮に残って朝から晩まで受験勉強ばかり。それを数カ月やって受けたという経緯なんですね。

私は旧制浦和高等学校で27回生になるんですが、変則的な経緯でたった1年しかやらなかった。普通ならば卒業何周年記念で文集を作ろうということになります。ところがわれわれ卒業していないから卒業記念とは云えない。でもそろそろ50年経っているから、何かいい名目はないだろうかと同期が相談して、じゃあ入学50年の名目でやろうじゃないか、ということで椿山荘で記念の行事をやりました。ずいぶん集まりましたね。大コンパをやって記念の文集を出そうということになった（浦高の敷地にあった古木に因んで『楫木抄』）。その文集にそれぞれの人が書いて出すんですけども、「おまえは歴史家だから何か書け」というわけで、とうとう書かされたのが「27回生の軌跡」という20頁位の一文です。結局、巻頭論文になってしまったのですが、そのために私は学術論文を1本書く位の労力を使いました。そこに詳しく浦高入学事情や、寮のこと、新旧の大学制度の経緯、さっきも言ったように3つが合併して東大教養学部になろうとしたがダメになった事情、詳細に調べました。それは批判に耐えられるような実証的な物でしたから、とても皆さんから喜ばれて、面目を施しました。

大学入試の時、浦高の仲間のほとんどが東大を受けました。私の文甲には40人居たんですが、そのうちの半分位が最初の年に合格しましたね。落ちた人は翌年受けて入ってきましたから、結局40人のうち35人まで東大へ来ちゃったんです。私の調べた限りでは、一高でもこんなにたくさんの人が東大へ来ていない、1クラスとしては。だからクラスメートが駒場でまた顔を突き合わせることになりましたね。

3. 東大時代 (1949-53)

(1) 駒場時代

◆司会 それでは東大入学後のお話をお願いします。

◆麻島 東大教養学部では旧制の高等学校から来た人と、新制の高校、つまり旧制高校に行かなかった人が新制高校を出て、また同じ土俵で入学試験を受けて東大へやってきた。そういうことで混合状態が発生したわけです。ですから最初、教養学部は文科1類、2類とかね、理科1類、2類とかそういう言い方をするんですけども、その中は語学力でクラス編成したんですね。例えば文科1類では旧制高校で第2外国語をすでにやった人は前の方のクラスになる。1組から何組までつまり、第1外国語の英語はみんな出来るものとして、第2外国語をすでに習った人ばかり集めてクラスを作る。新制高校出身の第2外国語をやっていない人を集めて別なクラスにする。それを既修組と未修組という言い方をし、当時は分けましたね。ですからわれわれ旧制高校出身者は、何となく優越感みたいなものを持ってました、あまり良くないかも

知れませんが。

駒場の教養学部の先生には、旧一高の先生もいれば、旧浦高や旧東高から来た先生もいるわけで、また浦高の先生に習うことがいくつかありました。

◆司会 浦高はもうその時点でなくなったことになるんですか。

◆麻島 いえそうはならないんです。われわれが居なくなっても、まだ一学年だけ残ってるんです、一年上の人たちが。それは埼玉大学浦和高等学校という名前になるんです。それが出て行くと、完全に浦和高等学校は消滅、埼玉大学だけになっちゃった。

当時、旧制の人は大学3年間ですが、私の場合は新制ですから4年間です。教養学部が前半の2年間、駒場の一高校舎を使いましたから、駒場時代とわれわれは呼んでます。当然ながら駒場にも寮があって、一高の寮ですけど通学できない人は入れる。自宅通学できる人はだめ。私は東京の者ですから普通じゃ入れないんです、まともには。そこで一計を案じて一寸だけ疎開した群馬県の出身ということにして、無理矢理に入れてもらった。いくつか寮があって、北寮、中寮、明寮の3寮でしたが、私は中寮でした。最初の1年間は、一年上の一高生がまだ残留していて、同じ部屋の中に一高生が一人か二人、われわれ新制で入ったのと一緒でした。同室に松山幸雄という一高生がいて、いかにも秀才面でしたが、夜になると講堂に潜り込んでピアノのトルコ行進曲なんかを自学していましたね。後に朝日新聞の主筆かなんかになって、有名人になりました。向こうは私の名前覚えてないと思うけど。

浦高の仲間がね、寮のあちこちに居りますし、浦高時代の服装もそのまま、依然としてね、マント着て下駄はいて渋谷などを歩いていました。初期の駒場の時代は、それですませていたわけです。

うちは貧乏ですから、出来るだけ自分で稼がなきゃいけないんで、アルバイトも寮にいながらずいぶんやりました。夏休みなんかはアルバイトでフルにつぶすとか。普段は、家庭教師から始まって、 Muskelアルバイトってわれわれ言うてましたが、筋肉労働までやったりしてずいぶん稼ぎましたね。

◆質問 当時の筋肉労働というとどんなものですか？

◆麻島 例えば引っ越しの手伝い。それから自動車会社（車両メーカー）に行って車体や屋根のペンキ塗り、新車両の窓を拭いたり、いろんな物の運搬とかしましたね。夏休みの1カ月間石鹸工場で働いたこともありましたよ。とにかく求人次第でいろんな種類のアルバイトをした。それから本郷へ行ってから小さな塾の先生もやってますけれどね。

アルバイトをしながら、その傍らやたらと映画を見ましたね、駒場時代も本郷へ行ってからも。年間に5、60本くらい見て、一生懸命感想をノートしてました。それもアルバイトの収入から出てるはずですが、名画と名がつくものは全部片っ端から見ましたね。気に入ったものは

2、3回見ています、洋の東西を問わず。だから授業の出席が足りないものもあって、駒場時代の成績は普通なみ、必ずしも良い成績ではありませんでした。

◆質問 バイトと映画の学生・青春時代という感じですが、勉強や先生で印象に残ることはありませんか。

◆麻島 駒場時代で印象に残ってる先生は大内兵衛さん、有名な財政学の先生が本郷から駒場に経済学を教えに来て、大教室満員で聞きましたけど、話もうまいし非常に温顔で、「さすがに大先生だな。経済学ってのはこんな事やるのか」と、とってもいい印象でした。大内先生は、若い時大蔵官僚だったから、私は後に信託業史を研究していた時、先生が大蔵で信託にもタッチされていたと推測してヒヤリングをしたかった。先生のお孫さんにあたる田付茉莉子さんに、お会いできるか頼んだところ、「いや悪いんだけど、おじいちゃんもうそれどころじゃなくて耄碌してるからね、今聞いても無理ですよ」といわれて、残念ながら不発に終わった記憶があります。もっと早く聞いておけば良かったと後悔しました。歴史家にとってこれも教訓です。

さすがに大学行ってみたら寮の中でもいろんなタイプの奴がいたし、クラスで結構秀才が多いなと思いましたね。語学が馬鹿馬鹿しく出来る奴というのがやっぱりいるんです。「なるほど世の中の出来る奴が集まっているんだな」と納得しました。でも、寮生活と通学では、やっぱり得る物の中身がずいぶん違っていたと思いますから、私は駒場寮に入れてよかったし、他の旧制高校の人と友人になれたこともよかった。

(レッドパーズ反対闘争)

◆質問 当時は学生運動が活発な時代だったと思いますが、先生への影響はいかがでしたか

◆麻島 たしかに駒場時代のもう一つ大きな経験は、レッドパーズ反対闘争でした。当時、アメリカからイールズがやって来て、反共的なイールズ声明を出した。大学の学生達も自治会を中心にイールズ声明反対の運動を起こした。本郷に呼応して駒場でもそれに呼応した。私は「アイウエオ」の「ア」ですから、駒場でも自治会のクラス委員にされました。そして反対運動の戦術として授業ボイコットというのをやりましたね。一方で、「学生の本分は授業を受けることだ」と主張する学生も一杯居てね、他方では「今こそレッドパーズに反対しなけりゃいけないんだ」というんで対立した。両派は、寮生大会でもクラスでもいろんな議論もしましたが、最後は自治会の全体投票に掛けて授業ボイコートを決定しました。実際にボイコットに入ったんですね。

当時、経済学部教授だった矢内原忠雄先生が初代教養学部長になって来ていて、この人はクリスチャンの人格者ですけれども、職掌柄ボイコット中止を言われる立場でした。学部長がそう言っても俺達はやるというんで、自治会は対立した。自治会が学生、特に寮生を動員して、

自分が授業を受けないだけでなく、正門を閉ざしてその前でピケを張って、授業を受けに来る通学生が入れないようにしました。そうすると矢内原学部長も、授業を受けたい学生と一緒に正門から入ろうとした。入れろ、入れないの押し問答して、入れないんです。それでとうとう学部長かお付きの人が通報したんでしょうね。機動隊がやってきて、正門のピケに機動隊の車ごと突込んでくるわけです。寮生が主力で何重にもピケ張ってるから、すぐに入れませんね。押し込んで来る車を必死で手で押さえてね、押し返す。浦高文甲のクラスメートの大野明男君が自治会の委員長だったから、正門の塀の上かなんかに乗っかって、号令をかけて「押し返せ！」なんて言ってるわけですよ。それでとうとう押し返しましたね、結局その車は入れなかった……。矢内原さんも諦めて、「じゃ、今日は帰るから」というんで帰って行った。そういうことがありましたね。私もそのピケの中にいたから、「これはひょっとしたら怪我か、捕まるのかな」と気が気じゃなかった記憶があります。自治会の反対運動をした人の中に、退学処分になった者が幾人も出ました。私の友人なんかも何人か退学になっちゃって、あとになってまた復学しましたけれど。だから卒業も少し遅れましたね。私はメガネが壊れただけでした。

◆質問 教員もストに参加したのですか。

◆麻島 学生だけのストライキで、教員はしなかった。むしろ教員は学生を抑える方でした。

(2) 本郷進学 — 経済学部へ

◆質問 駒場から本郷に進学することになるわけですが、どのように学部の選択はされたのですか。

◆麻島 教養学部で2年間やって、文Iの者は法学部か経済学部かどっちかを志望することになるんです。志望先が一杯だと、おそらく成績優先になるはずですが、大体希望通りだったと思います。私は最初から法学部へ行く気が起こらなかった、裁判官になるのもいやだし、官僚になるのもいやだ、と思わしてね。やっぱり下部構造の経済の方が、上部構造を規定するんだからと思って経済を志望したんですけれども、どういうわけか経済学科へいかないで商業学科へ行ったんですね。どちらでも行けたのに、何で商業学科を選んだのかなあ、と今でもあまり判然としないんです。

◆質問 当時は経済学科と商業学科でしたね。

◆麻島 そうです。今は商業学科でなく経営学科になっています。

◆麻島 強いて言えば理論の方ではなくて、実学を選んだのは、やっぱり就職を意識したんですかね。未だに内心忸怩たるものがあるんですけど。

それで本郷に行くことになりましたが、当時私の家は焼け出された結果、葛飾区堀切にありましたから、そこから本郷に通いました。京成電車で上野へ出て不忍池を横切って、裏門から通学するわけです。裏門から入っていくとおもしろいんですね。あそこにはまず霊安室があっ

て、東大病院のうしろですから霊安室がくっついて、否でも応でもその前を通らなければならぬ。少し坂を上がると、今度は実験動物の鳴き声が聞こえてくるところがあって、可哀相にもうじき死ぬのかと聴きながら通って、裏から時計台の方へ行くというコースでした。まあ、不忍池の中を突っ切るのも結構季節によっては良かったですね。

(柳川ゼミ＝経営学に応募)

◆質問 ゼミナールの先生はどなたでしたか

◆麻島 私は柳川昇先生のゼミ、経営学のゼミなんですけれども、そこに応募して入れてもらったんです。これも、何で柳川ゼミに入ったのか、今考えてみるとあんまりはっきりしないですね。そのころ経営学自体に私は興味もなかったはずなんですけど、柳川ゼミは先生が良いとか、なんか先輩から言われたんだらうと思うんですけど。

入ってみたら私にとっては良かった。当時、経営学のゼミには馬場敬治という、工場経営論をやっている先生もいて、これはきびしい先生。柳川先生はむしろアメリカ経営学をゼミで紹介され、当時としてはドイツ経営学もアメリカ経営学も両方とも一応分かるという形になった。私もゼミの中でいろいろと勉強させていただいたわけですが、なんと私の卒業論文は、ロイ・アンダーソン・フォークのPractical Financial Statement Analysisという本が素材です。私にこの本を先生が「これはどうか」といわれたんです。5、6センチはある厚い本でした。「ウン」と思ったけど、まあ先生が言うんだからしょうがないなと思って、一生懸命読みました。そのために夏休はずーと中央図書館に通いました。普通の閲覧室は天井が高いが、暑いので、いい場所はないかと探した結果、屋根裏のような所を見つけた。風は入るし、誰も来ないし、絶好な場所だと満足して、そこを根城にしてその本を翻訳して、それを種に論文を書きました。これが案外経営分析の勉強になったんですね。つまりウォールの趨勢法とか、メイヤーの経営分析とか関連文献を集めて、しょうがなしに読んで、それで財務分析の論文を仕上げた。その時にMoodyの『投資年鑑』も随分使いましたね。提出した卒論はゼミ限りのもので返却されませんでしたから、今となっては正確な題名が思い出せません。それでゼミの卒論は終わったのですが、この時の勉強が会社に入ってから役に立ちました。経営分析のツールを知っているから、現実の企業の分析にそのまま使えましたから。よく「大学でやったことは、すぐに通用しない」といわれますが、私の場合は「役に立った」というのが実感です。

柳川ゼミの2年間は楽しかったし、ゼミの同級生とは今でも会合を続けているほどです。柳川ゼミのOB有志は、今でも柳睦会として先生が物故されてからも夫人を囲んで集まっています。

ゼミの1年上に原口久子さんがいました。結婚して高橋久子さんとなったんですけど、女性ではじめて最高裁判事になった人。彼女は労働省の婦人少年局長の経験者ですが、細川内閣の

時にスカウトされたんですね。彼女も私も公務員試験に受かったのですが、「どこ行くのかな?」と思ったら、彼女は労働省に行った。私は役人になるのはやめて企業に行っちゃった。私も彼女が最高裁の判事になろうとは夢にも思わなかったですね。その旦那さんが高橋昭三さんで、柳川ゼミから住友信託に入って、途中で辞めて福島大学の先生になり、立教大学で定年を迎え、作新学院大学に行った人で、経営財務論をやっている。二人はゼミ同士の結婚でして、私も親しくさせていただいています。だから彼女が最高裁にいる時、何回か「いらっしゃいよ」って言われましたから、居るうちに是非行こうと思っているうちに、とうとう行きそびれちゃった。行けば中を全部案内してもらって、「最高裁ってこんな所か?」と多分言えたんじゃないかと。本当に惜しいチャンスを失いました。

◆質問 柳川先生のゼミでの勉強で何か印象に残ることは?

◆麻島 そうですね。柳川先生について云えば、先生は結構自由でしたから、ゼミでは誰でも自由に発言していいという雰囲気でした。先生は八幡製鉄の稲山さんと親しかったようで、頼まれて製鉄所の原単位計算などに関係されていたようです。そのためかゼミで「ストリップ」という言葉を聞かされて驚きましたが、新鋭の連続圧延機「ストリップミル」のことだと初めて知りました。そのころの私は知りませんでしたが、先生は大学を卒業して三井銀行へ入っているんです。三井銀行の柳満珠雄さんと同期なんです。勤めているうちに東大で席が空いて、帰ってこないかといわれて東大に復帰したんです。その時に持たされた講座が、経営学とか配給論なんです。しかし先生が書いた良い論文は、実は桐生の織物業の経済史的研究でして、これは学界で高く評価されています。それがあったから呼び返されたのか、呼び返された後の論文か、その前後関係は私にははっきりしませんけど、とにかく経済史が好きだったんですね。にもかかわらず大学での担当は商学的のものでしたが、私が歴史をやることについては非常に好意的で、のちに私が抜刷を差し上げると、よく「歴史は面白いね」といわれて、励ましてくれました。ですから柳川ゼミを卒業してからも、ずーっと柳川先生との付き合いが長く続くことになりました。ご夫妻には媒酌までしていただいています。

◆質問 本郷時代の講義や先生で印象に残っているのは、どんな授業ですか。

◆麻島 脇村義太郎という有名な先生が商業史をやっていて、私たちの時代には経営発達史という名前に変わりました。私たちが卒業してから後、これが経営史になりました。それを後で中川敬一郎先生が担当することになる。私は脇村先生の経営発達史を聴きましたが、その当時は眠くなっちゃうんです。何故かって言うと、細かい話が延々と続くからです。ジェームス・ワットはこういう人で、ある時こういう経験をし、こういうことをやって蒸気機関を発明したということ、もう非常に細かく説明するんです。そういう話ばかりの連続なんですね。「これで学問といえるのかな?」という印象。いまだに耳に残っているのは、ロイズの発生に

ついてです。ロンドンのシティでコーヒー店に何人か集まって商売の話をする、コーヒーを飲みながら情報交換をする、そういう中で保険取引がだんだんと起こってきて、それが発展してロイズになる、ということの説明が延々と長く続くわけですよ。だから「事実の羅列じゃないか？」なんて、若い時はそう思いました。私だけじゃなくてみんなそう思ったらしい。でも後になって脇村先生と顔を合わせましたが、さすがに「先生のあれは面白くなかった」とは言えませんからね。後で皆さんの話を聞くと、やっぱり先生の博識には感心している。実に丹念に事実を調べて、その上で自説を展開していく、そういう学風なんだと想像することになっているんですけど。

それから佐々木道雄先生の簿記原理も眠かった。その時間は少人数なのに、堂々と一番前で居眠りしたから、今では先生に悪いことしたなあと思うけど、当時の先生は全然怒らなかつた。商業学科にいながら会計学や経営学をあまり好きになれないで、だんだん経済史の方に関心が傾斜していましたね。経済学はマル経ばかりで、近経は助教授の古谷弘さんしかいなかったと思います。古谷さんは聴いて面白かったけど、すぐに水泳事故で亡くなりました。社会政策の大河内一男さん、金融論の館竜一郎さんを聞いたことは覚えています、日本経済史の安藤良雄さんは聴いていない。日銀から特殊講義で来られていた吉野俊彦さんや、日本郵船から来ていた人は聴いた記憶があります。また、どこの主催だったか工場見学会があって、幾つか見に行った覚えもあります。

経済学部での経営学は、旧制の方が馬場敬治先生、新制の方が柳川先生で、馬場さんの講義ももぐりで聴いてみましたが、あまり興味を持ってなかつたことを覚えています。柳川さんの方は中西寅雄の『経営経済学』や『経営費用論』も出てくるし、古川栄一のアメリカ経営学もあったから、独、米双方をやったわけです。中西さんの『経営経済学』は柳川昇・鍋島達の二人の弟子が本当は書いたんだ、と鍋島先生から聞いたことがあります。鍋島さんは東北大学から専修の商学部に来られ、私が柳川門下ということで、よく声をかけていただきました。

隅谷三喜男先生がまだ助教授で、工業経済論を担当していましたが、後に柳川ゼミの先輩なので、柳睦会で時々お目にかかるようになり、調停された成田問題での裏話などを聞かせていただきました。しかし講義を聴いている時には、ゼミの先輩とは全然知りませんでしたね。

◆質問 講座派の重鎮、山田盛太郎先生がまだいましたね、その授業はどうでしたか。

◆麻島 私も聞いてみました。というより見に行ったという方ですね。小柄で、蝶ネクタイして、難しい顔で講義していたのを覚えています。再生産表式の説明でしたが、当時も難解でした。大教室で大勢聞いていました。ひょっとすると最終講義だったかも知れません。私にとっては必修ではなかつたから見に行っただけですが、経済学科では必修ですし、何しろ有名ですからね。例の『日本資本主義分析』を読んでも難解ですけど。そのころの私は『分析』が学界

で持つ意義も十分知らなかったし、後になっても東大から専修に移られたことなど、私は専修に来るまで知らなかった。ところが社研では私の何代か前の所長なんですね。経済学部には山田先生のお弟子さんとして二瓶さんもそうだし、鍋島さんもそうだし、あとまだいるでしょう何人かね。

(他学部の聴講)

◆麻島 そういう時代で印象が強いのは、商業学科の講義にはもちろん真面目に出ましたし、他の学部の講義ももぐりで聴きました。法学部に川島武直という有名な教授がありますが、その『所有権法の理論』を買って読んでみたり、それから『日本社会の家族的構成』っていう本も読んでみたんですけども、非常に印象が深かった。何故かって言うと、法学部の先生であるにもかかわらず、戦前の日本の経済構造なり、日本の社会構造と関係づけて、日本の戦前の家族制度はこうであり、現在はこうもっていくべきである、というような説明だったと思うんですが、その中で私の知らなかった「家族制度の経済的・社会的・法規的な意味」っていうのがうまく説明されていて、「なるほどなあ」って思って感心して、授業まで聞きに行ったわけです。

それから傑作なのは、仁井田という教授がいてね、中国法制史でしたが、これももぐりで聞いてみたら面白かったですね。中国のいろんな法律制度を説明する中で、中国では孝行が大変重要なことであると。「忠」というのではなくて「孝」だと。親不孝をやった奴がいたとする。するとその人は当然処罰される。処罰された後、その人が住んでる家は「けがわらしい」ので取り壊される。その住んでる土地も「けがわらしい」といって大きな穴を掘っちゃう。もちろん本人の骨はどっかに散骨しちゃう。住んでいた土地までが汚らわしいからって大きな穴まで掘るとい話を聞いて、それほど「孝」は中国の社会では大変重要なのかと思った。それに類するような話がいろいろと出てくるんですね。「こりゃ商業学科の話より、こっちのがいいや」ってんで、他学部をずいぶん聞いてまわった。我妻栄さんみたいな有名教授はどんな講義をするのか好奇心で聞きに行く。行ってみたら、大教室で何百人もいて、しーんと聴いていましたね。今のように私語する学生は居なかった。やっていた民法総則かなんか、たいして面白くないけど、法学部の雰囲気はこういうものかというわけですね。そういう中で二つ注目したのは丸山真男さんと大塚久雄さん。丸山さんはすでに「超国家主義の論理と心理」という有名な論文を、『思想』だったと思いますけど出して、私も読んで丸山政治学に非常な新鮮さを感じました。戦後、民主的な時代になって自由にものが言えるようになったから、さっき言った川島さんにしても、丸山さんにしても、戦前ではボールに覆われていた日本社会の構造や特質が、非常に克明に、そしてわれわれが読んで感心するような形で提起されているんで、「いやあ、目から鱗が落ちたなあ」という、そういう印象でした。ある意味では「むさぼり読

んだ」と言うとおこがましいですけど、一生懸命読んだんですね。それが私の印象に強く残っているんで、この間も『丸山真男全集』が出るとつい買っちゃいました、全部。しかし、今見たら読んでないものがいっぱいありまして、当時はほんの一部しか読んでなかったことがわかりましたけど。やはり丸山政治学に対しては、若い時の私は大変惹かれるものがあったということですね。

それからもう一つは大塚史学ですけれども、私は商業学科だから「商業史」（正確には当時「経営発達史」となっていた）というのにはありましたが、「経済史」は経済学科の方の科目ですね。だから私には直接のは関係はなかったんですが、なぜか「経済史」にひかれて、つつい大塚久雄さんの例の『株式会社発生史論』とか、『近代欧州経済史序説』とか、『近代資本主義の系譜』とか片っ端から読みました。しかし完全に読めたかどうかは、まあ疑問ですが、大塚さんと同じような立場の高橋幸八郎さんの『市民革命の構造』とか、『近代社会成立史論』も読みました。この間このヒアリングのために本を出して見てみたら、ちゃんと赤線が引っぱってあるし、書き込みがしてあるから、今はすっかり忘れていますが、この頃はそれなりに勉強したのかなと思いましたね。大塚先生は後で出てきますけど、大塚先生の研究会にも出ているんです、私は。だから大塚先生の『大塚久雄全集』もつい買ってしまいました。

◆質問 駒場時代とは一変して勉学に明け暮れた本郷時代ということになりますね。バイトと映画はどうなったんですか。

◆麻島 本郷でもアルバイトと映画は続いています。歌舞伎や新劇、音楽会にも行くようになったから、勉強ばかりではありませんね。囲碁の手ほどきは友人から受けましたが、マージャンはやりませんでした。私の友人などは、「あいつはいないぞ」って言うと、「どこそこのマージャン屋へ行きゃ、あいつはつかまるぞ」ってというようなこと、そういうタイプの人も何人かいるし、ダンスの名手でいつもダンスシューズを鞆に入れていた友人も居て、バイトしている私とはやっぱり貧富の差がずいぶんあるなと思いましたね。しかしアルバイトもしましたが、ずいぶん勉強もしました。ですから本郷に行ってから成績はかなり良かったと思います。さすがに総代候補の声はかかりませんでした、まあかなり上の方のはずです。

（川村・原田先輩の影響）

◆質問 先輩等で先生の勉強に影響を与えた方がいるとしたらどなたですか。

◆麻島 そうですね、さっき浦高時代で話がでた川村善二郎と原田勝正の両先輩に、今から思うと私はかなり影響されたと思いますね。

どうということかという、川村さんは私が経済学部にはいた時には、もう文学部史学科を終わって大学院でしたか。服部之総さんを中心とする日本近代史研究会というのがあって、遠山茂樹、小西四郎、吉田常吉、青村真明、藤井松一などの人々がいたそうです。その研究会が国際文化

情報社から『画報近代百年史』を出していたわけですが、そこに川村さんが加わった。のちに原田さんも加わった。写真とその解説で明治以降の日本近代史を説明するという手法で、一冊は薄い本ですけど、シリーズもので何十冊にもなる。それがあたって近世三百年史、千年史、風俗史など次々に出しています。私も京橋にあった編集室に川村・原田さんを訪ねて、その時に服部さん以下の皆さんの顔を何回もみました。色川大吉さんや村上重良さんもいました。川村さんも服部さん以下の人々の影響を受けていたと思えますが、講座派の著作や考えが知らず知らずのうちに私にも伝わってきたのでしょうか。そして服部之総・入交好脩監修・日本近代史研究会編で、『近代日本人物政治史 上下』（東洋経済新報社、19年）が発行されましたが、経済史畑の人が書いた『近代日本人物経済史 上下』とペアです。『政治史』の方は、明治以降の政治家が何人か登場しますが、川村さんや原田さんが担当を人選したらしく「君も書けよ」って言われて、私はなんと浜口雄幸を書いたんですね、杉山君も書いています。署名入りでなく、原田さんが書いた「あとがき」に「誰々の世話になった」という表現で私や杉山の名が出てきます。とにかく学生時代に浜口雄幸のことを一生懸命調べて書いたわけですが、おそらく私の書いた文章が活字になった最初だと思います。当時、川村さんは両国の方に住んでて、地域の若い人たちを組織して読書会をやっていました。余談ですが、その時のアクティブなメンバーと結婚したのですが、植木等さんの妹さんです。伊勢朝熊の住職だったお父さん（植木徹之助）が、戦前に部落民を擁護して何回も検挙されるなど立派の人でしたから、川村さんものちに歴史家として部落問題に関心を持ち、取り組むようになったのでしょうか。現在、部落問題の研究と教育に関係する近代史家として活躍されています。当時、その読書会に誘われて、東大生だった原田さんも私も参加して、ベネディクトの『菊と刀』とか、マークゲインの『ニッポン日記』とか、いろんなものをみんなで勉強しました。その時に楽しく、仲良くした人たちは今どうしていますかね。いつの間にか川村・原田先輩と親密になってしまって、どうも私が歴史研究をやるようになったのも、その影響かなと思いますね。

4. 社会人時代（1953-77）

(1) 住友信託銀行へ就職

◆司会 大学時代の話はこの位にさせていただき、社会人時代の話に移りたいと思います。卒業されて就職されるわけですが、就職活動はどのようにされたのですか。

◆麻島 私は1953年の4月に就職したわけですが、当時の私は大学に残るつもりは最初からなかった。貧乏人が大学に残るなんて不可能であると。というのは、柳川ゼミの特別研究生に三宅皓士（のち福島大学教授）さんという人がいて、私の目から見ても裕福な家の息子だし、その人から大学に残ったら無給の時代が長く続くと言われ、私には到底出来ないと言われたわけ

です。だから最初から就職の道を選んだわけです。

ただ、さっき言ったように、われわれの同期の者は学生運動をずいぶんやってましたから、そういう人たちは会社で分かっちゃうから就職出来ないんです。仕方なしに、「じゃあ大学院でも行こうか？」という形で残るというケースはありましたね。だからそういう人たちがどう金銭的に苦労して勉強したかは良くわかりませんが、私はそこまでの関係なかったから、就職は出来ました。

私の就職の時には、旧制、新制のちょうど切り替え時なので、それがまた影響しました。1年上の人たちは旧制の高等学校を3年やって大学を3年やって出る。われわれは旧制高校を1年やって大学を4年やって出る。6年やった人と5年やった人が同時に卒業なんですね。だから1953年は2学年分がいっぺんに卒業した年でした。就職競争が倍加するわけですから、厳しい年でしたね。10月1日の解禁で一斉に企業に面接を受けに行く、しかも東大の場合には5社までしか事務が受け付けてくれないんです。当時は非常に厳密でしたから、受けて早く決まった先に行けというルールで、そうしないと絶対にあとは面倒見ないと言って、事務サイドは厳しかったですね。

当時の私は若気の至りで、世の中で生産に直接タッチしてるのが一番いい、つまり一番これが地に足がついている、製造業がやっぱりいいだろうと思って、製造業ばかり受けました。金融機関や商社、あれは浮き草稼業みたいなもので、商社は右の物を左に置くだけ、銀行は金を貸す、なんだ高利貸じゃないか、自分の性に合わないって、とにかくメーカーばかりを希望したんですね。

そのころは、ご存じの通り石炭産業は、戦後復興の要で非常に華やかでした。三井や三菱、そんなところは入れそうにない。じゃあ二番手の古河鋳業はどうだろうと、そこを受けに行きたわけです。他のメーカーでも、川崎重工なんかも出したら、書類審査だけで返ってきてしまう。5社のうちペーパーテストをやって面接まで行ったのは古河鋳業と小松製作所。私自身は古河に行きたかった。やはり花形産業だし、噂では石炭の給与はいいということになっていた。それで入れると思っていたら、面接で落ちてしまった。さっきの簿記原理の佐々木先生が古河鋳業をよく知ってるらしく、柳川先生からどうして落ちたか聞いてもらったんです。そうしたら返事は、「その人は線が細すぎる、石炭向きではない」ということでした。がっかりもするし、癪に障った。誰が入ったかって言うと、東大の応援団長やってる奴が合格なんですね。「なるほど、そいつにはかなわない」と思いました。その応援団長は、結局後になって聞いたら、入らずに富士製鉄へ行っている。

古河鋳業はダメでしたが、もう一つ受けた小松製作所は合格しました。しかしどうも行く気はしないんですよ。要するに、当時の小松は枚方工場で砲弾作ってたんですね。元は陸軍の造

兵廠で、その払い下げを受けて、朝鮮戦争の時に砲弾をたくさん作って儲け、一応企業としては発展しつつあった。しかし鉄砲の弾を作るのは「死の商人」だし、生産はいいけど「死の商人」にはなりたくない。やっぱり若気の至りかも知れないけど、そういう潔癖な気持ちを持っていたんですね。それで柳川先生に「申し訳ありませんが断りたいんですけど」と云いに行った。実は、小松製作を受ける時に先生が側面からもちゃんと口を利いてくれたんですね。それは誰かという、経団連の花村仁八郎さん、後に事務局長、財界の影の大将として非常に有名な人ですが、当時は経団連の総務部長だったのかな？柳川先生の後輩だったんですね。先生は「麻島君、花村君の所に挨拶に行ってくいよ」といわれて、ノコノコ行って小松を受けたわけです。そのせいもあったのかどうか知らないけれど、合格してしまいました。先生に「行きたくない」といった時に、「じゃあ花村君のとこへ行って断って来い」と言われて、仕様がなくて、おそるおそる花村さんの所に行って、「申し訳ありませんけど、何とかご勘弁戴きたい」と謝りました。これがご縁で花村さんに面識が出来、のちのち迄お付き合いさせていただいた。

◆質問 メーカー志望で、最初から銀行を志望したわけではなかったのですね、住友信託との出会いは何だったのですか。

◆麻島 小松の件の直前か直後か曖昧ですが、住友信託銀行が二次募集をやりました。つまり一次募集では思っただけいい人が来なかったため、採用枠を残し、二次募集をかけることになった。柳川先生から「住友信託が二次募集をするようだよ。それでも良かったら君も紹介してあげる」と言われて、多分小松製作よりこっちの方がいいと思ったんでしょうね。これはさっき思ったことと矛盾するわけです。商社や銀行を受けるつもりはなかったのに、小松を蹴ったらあと行くところ無いんですよ。「じゃあ、先生一つお願いします」ということになった。それで先生の紹介によって、試験を受けたんです。そうしたら何と数人の枠に百人ぐらい来ちゃったんです。もちろん筆記や面接で大激戦。東大だけでも何十人もいるわけですね。よく入れたなあ、と思ってるんですけど、おそらく柳川先生の紹介が効いてるんじゃないかと思います。何故かって言うと、住友信託の常務だった人が柳川先生と一高の同級生だったんですね。その人に柳川先生は「こういう奴が受けるから」と言ってくれたわけですね。それで受けてみたら、おかげさまで入れたと。

(2) 大阪勤務の半年間

◆質問 1952（昭和27）年という貸付信託法や長期信用銀行法が出来て、長期金融制度が発足した時期だと思いますが、信託銀行の将来について何かお考えがあったのですか。

◆麻島 とんでもない、その翌年に住友信託に入って、まだ信託のことは何も分からない時ですから。確かに1952年に財閥の称号復活があって、富士信託銀行が住友信託銀行に名前が変わったという直後だったんです。貸付信託はスタートしたばかりで、まだどれだけ発展するかわか

らなかった時期です。それに私は最初から行きたかったわけではなく、偶然に入ることになっただけです。信託のことも全然知らなかった。

それで入ってみたら、住友信託も旧住友財閥の一員ですから、「住友に入っちゃったんだあ」なんて、自分の予想しなかった結果に、ある種の感慨を持ちました。住友には連系会社という呼称があって、直系会社の意味ですけれども、そういう中では、住友銀行とか、住友化学とか、住友金属がやはり上位なんですね。ただ住友金属鉱山と住友不動産は歴史的に別格、信託は二番手のところにランクされている。しかし当時信託銀行は6行あって、信託業界では住友信託が資金量で一番だったんです。だから「業界では一位だから、まあいいところらしい」と思って、小松製作に行かなくてよかったと自分で納得できましたね。

1953年には、学卒だけで33人を採用し、高卒をまた数十人採用して、前年とも後の年とも比べて、非常に多いんです。その年だけが新旧混ざって大激戦でした。同期の中から、のちに社長が出ているし、多士済々でした。住友信託ではその前年までは東京で採用になった者は東京勤務、大阪の者は大阪勤務と大体決まってるんです。だから私は夢にも大阪に行くなんて思っていなかった。ところが入社前に配属先の通知がきたら大阪と書いてあるのでびっくり仰天。東京育ちの私は大阪なんていやだなと思ったわけですけど、もうやめる訳にはいかない。しぶしぶ大阪へ行ったわけです。東京採用のうちの半分ぐらいが大阪に行かされました。本店は大阪ですから中之島の住友ビルの中に経理部があって、そこに配属されて決算事務をやることになった。初めての大阪生活で独身寮ですが、6畳1間に大卒と高卒が一人ずつ入れられてね、新築の宝塚の寮から中之島まで通うという生活が始まったわけです。

◆質問 最初のお仕事は何だったのでしょうか。

◆麻島 入社後最初の1カ月間は研修期間で、講義やそろばん練習をやり、その上で私は経理部に仮配属されました。半年間の見習い期間、その後正式の配属というシステムです。しかし後からみると、この経理部時代はやっぱり良かったと思いましたね。なぜならやはり会社の全体がわかるようになった。本店というものの雰囲気もわかる。経理にいて決算事務をやるから、自社だけでなく業界のことも比較感で分かる。だから仕事としては良かったと思いましたね。住友は大体、官学が威張っているところなんですね、その中で珍しく立教大学を出た部長でしたが、割合いい人物で、太っ腹な人だから、新入社員の私にもよく声をかけてくれました。その代わり次長が神経質でぴりぴりしており、課長は真面目一方、という組み合わせの中でしたが、大学卒は大切に育てて、とってやりやすかったし、みんなと親しくできた。

当時の経済状況からいうと、背広を買うのも大変でしたね。月給が5、6千円なのに、背広が1万円くらいするんで、1カ月分の給料では買えませんでした。だから高卒の人達は、研修の時、まだ詰襟の学生服で来てるんですね。学卒はさすがにみんな背広着ているわけです。

私も背広は月賦で買った1着だけ。初めての冬にはオーバーも買わないといけない。オーバーが1万7千円くらいで、月給の2ヵ月分以上、もっと出さないと買えない。今から思えば高かったという感じがしますね。しかし寮にいるから会社でかなり面倒みてくれて、いわゆる日本の経営ですね。だから、日常的には月給で結構いろんな飲み食いもできましたから、半年でしたが結構おもしろかったです。

半年経って、私は東京に転勤できましたが、希望通りでラッキーでした。母親が病気でしたから、家で面倒みるために上司に東京勤務を頼んでおいたら、正式配属の機会に東京へ転勤ということにしてくれました。割を食ったのは、私の1年前に入った慶応の人で、通常ならその人が東京に帰って、私がずっと経理に残るはずだったが、それを振り替えてくれたらしい。その人は10年間経理部にいましたね、わたしが帰ったために。

(3) 長い調査・審査畑

①東京支店預金課

◆質問 東京でのお仕事はいかがでしたか。

◆麻島 東京に帰れるのでやれやれですが、どこに配属されるかと思ったら、なんと東京支店の預金課に欠員があったとみえて、そこに行かされました。預金課ではそろばんをはじいて、伝票を計算して、帳簿をつけ、そして店頭ではお客さんにお辞儀をして受け答えをする。今、みなさんが銀行の窓口へ行けば女性がやっていますね。あれを昔は、男性と女性の両方でやっていたわけです。預金課の中では、学卒は貴重な存在ですから、すぐに重要なことをやらされました。その2年間は、仕様がな、お客さんには頭を下げて、一生懸命計算をやって、ずいぶんそろばんもうまくなりました。

預金課では年末なんてのは忙しくて、その日には帰れませんでした。月末でもその日に帰れないことが多い。要するに、月末は分量が多くて計算が輻輳しますから、そいつを全部処理して計算が合わないとは帰れないんです。その計算がなかなか合わない。誤りを発見するコツも覚えましたがね。残業も夜中までかかると女子行員はなるべく早く帰す。それでも帰せない時は、最後に男子行員がタクシーで女性を送り届けてから自分の家に帰る。だから午前様ですね。われわれが残業していると、課長が「ちょっとすまんけど」と言っていなくなる。実はビルの地下室にドラム缶のお風呂があって、そこの風呂入って、いい気持ちで帰ってきて、「みんなよくやっているねえ」なんて言ってくれる。おおらかな、ユーモラスなことでした。

銀行の窓口を経験して、計算もちゃんとできるようになりましたが、私としては、自分の友人達が花形の貸付課で企業に大きな顔しているとか、あるいは、本部勤務で優雅にしているのを見ると、ずっと預金課でお客相手にやっているのは憂鬱だなあ、早く替わりたいなあと思って、いつも転出希望を出すんですが、全然希望は聞いてくれないんです。諦めていたら、ある

日東京審査部に欠員ができたらしくて、私がそこに転勤ということになったわけ。やれやれ嬉しいということで預金課から足を洗って、東京審査部に移りました。

②東京審査部へ転勤

◆司会 それでは東京審査部時代のお仕事についてお話下さい。

◆麻島 そこには、調査係と審査係と二つありました。関西系の銀行は、みな大阪が本店ですが、東京支店のウェイトが非常に高いんです。要するに東京は東日本の営業拠点であるばかりか、東京探題として役所との窓口、業界の窓口としても機能する。だから専務や常務が東京に駐在し支店長も取締役という大きな店舗なんです。だから東日本と西日本に分けて、西は本店がみる、東は東京支店が面倒みなくてはならない。東京審査部は本部機構として東京に置かれ、東日本地区の審査、調査の権限を持っていました。

もう一つ東京にある本部機構は、東京事務所、これが官庁や業界と折衝する触覚の機能を果たすわけで、これもまた重要なんです。本部機構の二つだけが東京に置かれ、私は東日本の要に配属されたわけです。このシステムは住友銀行でもまったく同じです。

◆質問 当時の住友信託の場合、東京地区では支店の数は少なかったと思いますが、どんな状況でしたか。

◆麻島 東京都内では、支店はまだ数カ所しかなかったですね。東日本は静岡支店以北、横浜、仙台、札幌の支店です。金沢支店は西日本の管轄です。だから東京地区に圧倒的な比重があり、資金量や貸出量では、大阪本店にかなり近い大きさを持っていました。関西系の金融機関は大体そういう仕組みなんです。住友銀行と住友信託は、ほとんど同じような機構です。

私は東京審査部において、私は一番下の役職、つまり副係長から始まって、係長になって、副長（課長職）、次長になり副部長になり、部長までやって約20年間いました。預金課が2年強で、経理部が半年ですから、会社員生活24年間のなかの20年間くらいは、この部において「ぬし」的存在になりました。途中から審査部門が独立して、調査部門は東京調査部に名称は変わりましたが。

そこで何をやったかという、企業の調査と貸出の審査です。企業の調査は、申し込まれた貸出の可否を判断するために企業内容をいろいろと調べて、結論を調査にまとめて、それを審査にまわす。貸出の条件、期間とか担保とか利率とか、そういうことを決定するのが審査、貸すべきかどうかを決定するのは、調査なんです。

相手の企業から貸出の申込を営業店が受けて、申請書や企業からの提出書類を調査部に回わしてくる。申込事情を検討し、その企業の現状と将来性を調べ、財務分析もやる、財務比率を計算してみたり、勘定科目の内訳を調べ、相手に説明させるし、工場を実際して生産状況なり機械設備の優劣をみ、同業者と比較もする。経営者と面接して品定めもする。さらに相手の計

画が妥当かどうかを傍証固めと言って、業界や官庁に聞いてまわったり、官庁では計画が本当に認可されるかどうか、それだけの設備投資をやって、需要は果たして大丈夫かどうか、そういうことまで調べる。こういう調査は「企業調査」といって、景気や産業動向を観察する「経済調査」と区別しています。これだけのことをやるのは大変ですが、面白いし、やり甲斐がある。だから20年間で随分いろいろな工場を、多分数百見ていると思いますね。装置、機械も門前の小僧でわかるようになったし、そういう時に、中学時代の学徒動員で自分がフライス盤工として工作機械の職場にいたことが、多少は役に立ちましたね。機械はこういうもんだと分かっているから。

また、技術も少しは勉強しなきゃいけないから、特に石油化学になると一層必要で、炭化水素系のいろんなもの、ベンゼン角がどう、分子式がどう、触媒や反応条件がどう、その関係をずいぶん読みましたね。だから今でも製油所や石油化学工場に行っても、プラントを見れば大体どういう構造か、何を作るかある程度わかりますし、学生連れて工場見学に行っても私でもある程度説明できます。

企業調査をやっているうちに、いつの間にかベテランになりましたが、仕事がおもしろかったから転職したくないんでね、転職の希望調査の時は、いつも残留希望、そういう風に頑張っているうちにどンドン年季がはいってしまった。その代わり残業はもちろん、ピークには家で調書を仕上げで職場に持参することも多かった。今考えるとよく時間外で仕事をした。

ただ課長ぐらいになると、企業調査の調書の作成、指導だけじゃなくて、今度は官庁と自分で折衝したり、業界と折衝するという仕事が出てきて、随分役所には行きましたね。主として行くのは通産省、あとは大蔵省、時には文部省。医療関係だと厚生省なんかも行きました。あちこち部下を連れて聞きに行ったり、いろんな情報を聞かせてもらったりする。

③企業格付法の開発

課長時代で一つ変わったことをやったのは、企業の格付でした。調査対象企業一つづつを定性的に調べるというだけじゃなくて、もっと大量処理ですね。企業からの申し込みがあれば、これは良い企業か悪い企業か、財務データをバーッと機械で計算させて、比率を点数化して、何点だったら貸せる、何点以下だったら貸せない、そういう仕組みを作ろうと。これには、全上場企業や自社の取引先の財務データを入力し、因子分析の手法を使い、コンピュータで計算させる必要がある。自分では出来ないのでも部下に研究させてやらせましたが、彼は法学部出身ですが、よく勉強して格付けの方法論を作ってくれたので、現実に大量のデータを投入して格付けを実行したんです。

これは東京調査部で私が音頭として、上の承認を取り付けて企業の格付表を作り、全店に配布して、利用法を啓蒙しました。私自身は革新的なことをやったつもりでしたが、現実には財

務データの入力が大変なんです。つまりデータは、決算が終われば入れ替わってくるでしょ。次々と追加投入し、古いデータを切っていく、あるいはどんどん蓄積していく。パートを雇ったのですが、その労働力の維持管理が大変なんです。そうしたら日経新聞や長銀もそういうものをやり始めた。

◆質問 早くから格付を開始されたことに興味を持ったのですが、当時のコンピュータの性能上限はありませんでしたか。また格付けをおこなっていた他社と比べて、分析方法などで相違や特徴はなかったのでしょうか。

◆麻島 他社の内部事情まではわかりませんが、データ処理が中心ですから、方法的に難しいことはないはずです。コンピュータにとっては量は多いが、簡単な計算ですから難しいことはない。住友信託で目指したのは上場企業一般だけでなく、自己の取引先まで入力して、自社用に役立てるということ、また、因子分析の理論によりながら、企業の評価に自分なりの考え方を盛り込むことにありました。日経や長銀が開発して外部に売ろうとしていたのは、汎用性を意識したデータの集積です。それをどう生かすかは買った者が自分の用途に合わせて考えるということです。利用者がそれぞれ財務データの入力から始めるのは、全体から見れば重複投資であって、誰かが代表して入力、加工してくれればいい。残念ながら私が部下にやらせるのは本業からいえば片手間であり、日経の方がそれを専門的に大規模に処理する体制をとれば、もはやコスト的には対抗できないわけですね。しょうがない、泣く泣く中止して、日経の作ったデータを買うことに転換しました。上の承認をとるのにずいぶん苦労したけど、多分上は、「麻島のやつは、そんなことをやったけど、やっぱり、だめだったじゃないか」と思ったかも知れませんが、アイデアは早く、自社用のはずで、途中までは「そんなことができるのか」と、興味を持ってくれたんですけどね。やはりやるなら本腰入れて大規模にやるべきで、中途半端ではダメですね（笑）。

◆質問 先生の研究というより住友信託の話となりますが、当時、銀行の融資審査の一環として、そのような企業格付がどこの銀行でもおこなわれていたのでしょうか。そのころ日経が始めたとのことですが、日経は公表していたのでしょうか。

◆麻島 厳密に言えば他でもやっていたかも知れませんが、耳には入ってきませんでした。だから独自であり、先行していたつもりでした。少したってみたら、日経や長銀でもやっていることが伝わってきたわけです。しかし前にも云ったように、上場企業の財務データの販売なのであって、融資戦略を含んだものではありません。財務データを買うと云うことは、みずからデータを入力・加工するコストより安いからです。

◆質問 このような格付けを銀行がしていたとすると、バブル期の銀行融資をみた場合、1980年以降、あるいはもう少し前から融資審査体制が変化したように思えますが、この点はいかが

でしょうか。

◆麻島 企業格付の発想は、貸出申込の選別の面と、貸出先の新規開拓の面とがあり、個別審査にあたっての材料提供の意味なのです。しかし資金過剰が進行すると、もはや選別などと云っていられず、いかに企業にカネを押しつけるかの競争になって、格付に構ってられないということでしょう。私が銀行にいたのは、まだ銀行優位の時代、まだ融資の安全性が維持されていた時代だということでしょう。

④初めての海外出張 ― 日本生産性本部の第3次信託視察団

◆質問 課長や部長になられると、対外活動が増えると思いますが、いかがですか。

◆麻島 課長になりたての頃の出来事に、海外出張があります。昭和30年代といえば、外貨制限があり、海外旅行が自由に出来る時代ではなかったから、海外出張は社内から羨ましがられることでした。私にとって初めての海外出張は1965（昭和40）年で、日本生産性本部の第3次信託視察団でした。当時はいろんな業界が、視察チームをアメリカに派遣していました。製造業のチームもあるし、金融業のチームもあるし、そういう中で信託もチームを派遣することになり、私は第3次の信託チームとして行ったんですが、当時の私はまだ課長でした。

第1次信託視察団は、住友信託が信託業界の会長銀行でしたから、奥平常務（のち社長）が団長で、各行とも常務か専務と次長か課長がペアで出て、十数人でチームを作って行く形でした。その時に私の直接の上司が団長と組んで行く人でしたから、頼まれて下働きをさせられました。チームが行く前から、アメリカの信託事情について資料を集め、報告書の原案を作っちゃう。結局、行った本人は何も書かないで、私が総論を書かされた。それは日本生産性本部発行の『アメリカの信託業務』という本になっていますが。そういうこともあったためか、第3回目に長村常務が行くことになった時、私が指名されました。長村さんは、私が第1次で下働きしたことを知っていたでしょうし、浦高の先輩、東大経済の先輩でしたから、私を後輩だと思ってくれたんでしょう。

当時の生産性本部派遣の視察団のやり方はこうでした。出発の大分前にチームで相談して訪問先を決め、あらかじめ質問書（Questionnaire）を送っておく。訪問先はそれを見てあらかじめ回答を用意し、訪問時のミーティングで答え、さらに質疑をする。ミーティングでは同時通訳が片っ端から通訳してくれる。ベテランは確かにうまいもんですが、そうでない人がやると、われわれが聞いていても、どうも訳を飛ばしているなど分かるんですね。なんとなく変だなあ、こっちはこういうこと言っているはずなのに、足りないじゃないか、と。

◆質問 通訳はこの当時、日本で確保してきた訳ですか。

◆麻島 生産性本部が雇っている専属の人がいます。そういう同時通訳者をチームにつけてくれて、旅行中同行してもらおう。これはいいですよ、われわれは日本語でいいから助かります。

アメリカでは銀行を訪問して、その信託部がどうなっているかを聞いて回ったり、工場も見学した。私はこのとき初めてフォードの工場を見ました。さすがにフォードの工場、デトロイトでしたか、やっぱり大工場でしたね。工場の中に製鉄所まであって驚いた。黒人のおばさんなんか、ラインで男と同じように力仕事をしているのを見て、やっぱり厳しいもんだなと思いましたね。

それから役所にも行きましたね。たとえば連邦準備制度とか、通貨監督官や、SECなど。そういう中で時々観光もしましたね。大体勉強の方は次課長がやる、質問もそうです。お偉いさんは行って同席して感心しているだけ、そういうのが大体こういう視察団の姿です。

よかったのは、生産性本部派遣の視察団となると、生産性本部がいろいろと手を回して、便宜を図ってくれて、一流ホテルでも安く泊まれるんです。当時は外貨制限がありますから、一日に35ドルしか持ち出しはできない。だから1カ月滞在でその30倍、大体千ドルくらいしか割り当てがない。それでやってこなきゃならない。ところがヒルトン系のホテルが多かったと思いますけれども、泊まった部屋に料金35ドルと書いてあるいるんです。しかし計算してみると、実際には10ドルしかとられていない。だからかなり格安にしてくれて、残りの25ドルで飲食、雑費とかいろいろなものを買うことが出来た。とっても良かったのは、飛行機が全部ファーストクラスなんですよ。それは偉い人と同席ですから、ファーストクラスが適用される。課長ぐらいでは普通なら絶対乗れない。絶えず常務の隣に座っているから、飛行機の中でよく飲みましたね。その人が飲み助でしたから、飛行機でもレストランでも、もうすぐ飲む。だから私はいつもお相伴、飲み助同士でいい思いをしました。

ご存知でしょうか、ニューヨークのマンハッタン島の真ん中あたりに、ウォルドフ・アストリアという有名なホテルがあるんです。2000室ぐらいでアメリカ最高クラスというホテルにわれわれは泊まったんですが、その時はそんなにいいホテルだとは知りませんでした。後年、私は外国経営史やっている時に学生に話しますが、ウォルドフアストリアはアメリカ人が一度は泊まりたいと思うホテルで、これにはこういうエピソードがありますよ、と。そこに泊まっている国王に部下が外部から電話をかけたら、交換手が言うのには「あなたのおかげになる国王はどこの国王ですか」と言われたと。要するに、国王が何人も泊まっているというわけ。かける人は俺の国王一人しかいない、自分のヘッドしかいないと思ってかけたら、何人もいる、それ程偉い人が泊まるホテルだというエピソード。ということも私も後で知ったわけですが、そこも10ドルで泊まれたわけです。だからそういう点でも、贅沢な旅行でした。

この時の視察旅行でアメリカの銀行とか信託の実状を知ったのが、後でとっても役に立ちましたね。自分で外国の信託業をずいぶん書きましたけど、その時の参考になりました。やはり生産性本部で海外視察するのは、あたかも明治の人たちが海外視察をして、いろんな見聞をし

て来るのとどこか似てる点があるなと思いました。戦後の日本にとって、こういう形でアメリカや欧州へ行って、いろんなこと学んでくることは、一時期は必要だったかも知れないなと実感しましたね。

確かに生産性本部ということで、向こうの人たちも親切に対応してくれました。質問書には、随分よく答えてくれたし、訪問先のいろいろな現場も見せてもらいました。たとえばファイリングシステムですが、当時すでに完備していましたね。銀行の信託部のオフィサーに会ったとき、「今日あなた達がお見えになったことは、記録としてファイルに入りますから、何年後に来られてもすぐわかりますよ」といって、ガラガラってキャビネを開けて、前に来た人のファイルを出すと、何年何月に誰が来て、どんなことを話したかが記録されていた。今はやっているでしょうが、当時の日本ではそこまでやっていなかったから感心させられました。

それからもう一つ、やっぱり向こうの現場を見ておもしろかったのは、オフィサーとクラークの区別でした。訪問先の銀行で、昼時なので食堂を見たいといったら案内してくれた。大衆食堂みたいな大きな食堂で行列して、セルフサービスでトレイに乗せて席に着き、食べたらずぐに出ていく。それを見た後でわれわれの食事には別の食堂に案内された。それはオフィサー専用の食堂。さっきのは、クラークのための食堂。オフィサーとクラークが峻別されてるんです。クラークは毎日のように面接して、入社してくるが、他方では毎日のように首になっている、あるいは辞めて行く。週給何ドル、仕事は何、時間は何時から何時までと決められる。オフィサーの方は、年俸何万ドルで雇うけれど、こちらは任される仕事の権限が決まっていて、自分の能力を証明して契約を更改して上昇するしかない。その代わり彼らオフィサーは立派な食堂で、昼間からお酒を飲んで、誰かと談笑しながら、何時間でも食事をしている。「随分差があるもんだなあ」って言ったら、「アメリカではこれは当然です」って。要するに「あなたは就職する時にオフィサーで就職するか、クラークで就職するか自分で選んだんだよ。選ぶ自由は与えられている。選んだ以上は差別がつくのは当然だ」という。これは「厳しい社会だな」と実感しましたね。その代わりオフィサーはすごく働く。実績を示さなければクビになっちゃうから。収入を多くするためには、外部で資格を取って自分を売り込む。家でも仕事をする。スタートラインの平等さ、選択の自由は保証されているが、選択結果、競争結果での大きな格差はあって当然、建前は自由・平等でも、実態上は生活水準に大きな格差が存在する、そういうアメリカ社会の風土を見せつけられ、つい日本の社会風土と比較してしまいましたね。

結局、アメリカで西海岸から東海岸まで各地を1カ月視察し、報告書は帰国後に自分で書きましたが、現地でチーム解散後、長村常務と私だけはその後さらに欧州を1カ月間回りました。お陰で世界一周して見聞を広めることができました。

欧州1カ月はロンドンから始まって、パリ、フランクフルト、それからデュッセルドルフ、

ベルリンにも行ったし、ジュネーブやローマまで行きました。

アメリカは公式行事でチーム行動でしたから、ある意味では気楽でしたが、欧州は二人旅ですから、私が質問書を作り、訪問先に送っておいて訪問しなければなりません。今度は通訳いませんから、自分でやんなきゃならない。日本を出る前に一生懸命会話を習ったんですが、やっぱり訪問先では四苦八苦でしたね、ミーティングになると。普通の会話だけならまだしも、送った質問書への回答にさらに反論するのは至難の業でした。ボスは何も言いませんから、みんな私がやらなきゃいけない。ロンドンのウェストミンスター銀行、パリのソシエテ・ゼネラル、フランクフルトのドイツ銀行、ローマのイタリア興業銀行、西独のヘキストなどを訪問しましたね。ぜいたく旅行させて貰った以上、このくらいの苦労は、と思って頑張りました。そのあとアテネ、カイロ、香港を回って、2カ月強の世界一周旅行は終了です。

結果として、世界を一回りして帰ってきて、やはり異文化と接したのが若い時の、掛け替えない良い経験でした。また持ち帰った資料を手掛かりにして、帰国後もまた資料請求をあちこちしましたし、それで論文の材料が出来ました。英、米、独で信託の本を買ってきたし、そういうものが私の外国信託業の幾つかの作品の基礎になりました。高垣寅次郎監修『世界各国の金融制度』の第12巻に、『第2章アメリカの信託業務と信託経営』を書きましたが、これがアメリカ信託業務に関する一応の結論です。

◆麻島 東京調査部長になると、今度は重役と行動することが結構多くなりまして、審議会なんか一緒にいっても、副社長は内側の席に座って、私は外側の席に座ることになりますけれど、審議会なんかはずいぶん行きました。それから業界とか住友系の会合がありますから、トップの代理で行くとか、顔もいろいろと繋がる。特にパーティなんかね、代理で行かざるを得なかったですね。酒を飲んでも顔に出ないから、パーティ後会社に帰っても平気でした。

部長として部内の数十人を統率すること以外に、よく出歩くこともあった。その中で面白い経験があるのは、イラクへの出張でした。貸出先の日本イラク石油が、現地で精油所の竣工式典をやるからと招待があった。その会社はイラクに対する日本の共同投資でしたから、住友系では銀行で1人、信託で1人、生命で1人、商事で1人云々という形、私は信託の代表ということで参加しました。パリからバクダットへ行って、バクダットから軍用機で国境の最先端まで行く。砂漠の向こう側にイランの戦車が待機しているのが見えましたね。ということは国境地帯に近いところに石油施設を作って、向こうと一触すれば戦争になるというな場所でした。今となっては行けないでしょうから、珍しい経験でした。だからうまい時に行って現地のプラントも見だし、それから砂漠の様子も見てきた。バクダットでモスクの中を見たかったけれども、さすがに異教徒だから入れてくれませんでした。しかし、市場の雑踏とかイスラムの風俗など見て、本当に異文化に接した気がしました。一つだけ失敗をした。砂漠に設営して大パー

ティーをやるんですね。フランス人も来る、イラク人も、もちろん日本人も来る。大パーティで骨付きの肉とか魚とか出るでしょ。うっかり水割りを飲んじゃったんですよ、水割り。そうしたらひどい下痢。要するに水がいけなかったんですね。氷だから、つい気がゆるんじっちゃったんです。氷は水からできていますからね。用心してミネラルウォーターだけを飲んでいけばいいものを、つい水割り飲んだために、すごい腹下し。フランスに帰る飛行機でおいしい料理が出てまったく食えなくて、惨めな思いをしたというおまけがついています。

(4) 研究活動

①事典や雑文の執筆

◆司会 これまでのお話で、先生の研究の前提になる経営分析の手法とか現場感覚を獲得されたと思いますが、銀行員時代から独自の研究活動をされていますね。

◆麻島 そうですね。社会人時代の研究活動というとおこがましいんですが、いろいろとやったことがあります。たとえば事典の原稿執筆というのを、預金課にいたころからすでにやってきました。河出書房の『日本歴史大事典』、10冊ぐらいのものですが、さっき言った川村先輩がその企画に関係していて、「事典の原稿書いてくれよ」といわれて数十項目ぐらい書きました。引き受けた項目について調べて書くわけですが、その中で一番大きい項目が「ビール事業」で、2000字くらい書いてます。今でも復刻されていますが、事典を引くと私の名前が出てきます。原稿を書くと、預金課の窓口で出版社の人が取りに来ますから、人に分からないように封筒に入れた原稿を渡して、また、次の項目を頼まれる、という具合でした。まあよそから見ると、何やってんだと思ったでしょうけれど。

事典の原稿はそれが最初であって、今に至るまで平凡社、小学館、吉川弘文館とかの歴史項目と、経済学事典などの金融項目と、両方ずいぶん書きましたから、今ではちゃんと調べないと何の項目書いたんだか、自分でも分からなくなってきました。調べものしてて事典を開けてみたら、自分が書いた項目に出くわして、こんな項目も書いたんだっけと思うことがあります。事典項目も川村さんがコツを教えてくださいました。当然400字とか、200字とか制限がありますから、一つか二つに焦点を絞って、それだけ書けばいいんだと。いろいろ書こうと思うから大変なんで、特色を出すような、あるいは一番ポイントになることだけを書けばいいんだ、そういうコツを教えてもらったことを思い出しますね。

それからサラリーマン時代の最初の頃、なんと私が『現代アジア史』の第4巻に10頁くらい書いているんです。これは原田さんにこの部分書いてくれって頼まれて代筆をした。別な人からも頼まれて『世界史講座』の第7巻にも、10頁くらい書きましたね。今でもその本はちゃんと持ってます。さすがにそれらの本には私の名前はのりませんが、知るのは自分だけ、ということですね。まあ言いたかったのはそういうことを、20代の半ば、割合早くからやっ

たね、考えてみると。

◆質問 歴史ではどんな内容ですか。

◆麻島 『現代アジア史』の方は、日本の政治思想かなんかの部分、『世界史講座』の方は、サンフランシスコ講和体制などを書かされているんです。

◆質問 丸山真男をやっていた関係ですか。

◆麻島 いやそれとは関係ありません。原田さんが頼まれた部分の一部分をこっちに回してきたという感じで、日本人のアジア観の一部分でした。

②信託業史の開始

◆質問 先生は早くから信託業史の研究に着手されていますが、そのきっかけは何だったのですか。

◆麻島 そうですね、信託業史に本格的に取り組んだのは、銀行に入って2年目か、3年目くらいだと思います。そのきっかけは、加藤俊彦先生の講演を聴いたことでした。先生が『三井信託銀行30年史』を大島清さんといっしょに書いているんです。三井信託が学者に頼んで、前半部分を書いてもらったわけです。加藤先生は当時の段階で把握可能な外部資料をサーベイして、内部資料もそれに加えて書かれた。だから『三井信託銀行30年史』の前半部分は学者の書いたものとして、きちっとしています。後半は社内の方が書いていますけど。先生は東大の『経済学論集』に「日本における信託業の発生と発展」という論文を書かれた。そういうことがあったために、住友信託の東京事務所が加藤先生のことを知って、社内での講演を頼んだんです。先生は住友信託に招かれて、まだ助教だったかも知れませんが、自分が三井信託でやったことの中身を講演してくれたんです。それを聞いて私は大変刺激された。私も何か出来るんじゃないかなという気がしてきたんですね。それで講演後に加藤先生に「こういう者です、またいつか教えていただきたい」と自己紹介しました。その時に私が刺激されたのは、金融史をやるといいな、特に信託業史は加藤先生がやったのがあるだけで、どうも誰もやってないらしい、それをやってみたいという意欲が湧いてきたわけですね。

それで自分なりに研究を開始した。最初に書いた論文は金融経済研究所の雑誌に載せてもらいました。金融経済研究所の前身は、戦前、金融研究会と言って三井全体をバックにしていたんですが、戦後は三井銀行の運営になって金融経済研究所となった。そこが『金融経済』という雑誌を発行しているんですが、大学の紀要とは違って外部の学者や研究員が執筆するアカデミックな雑誌なんです。それに「本邦信託業の集中過程」を1957（昭和34）年に載せてもらった。これが私の処女論文ですが、戦後注目された万成滋「日本における銀行集中の過程」をどこかで意識した題名です。それから続々と『金融経済』に書きました。私の著作目録では、最初の頃ずーと『金融経済』への掲載論文が並んでいます。そこに発表の場を与えていただい

たのは有り難いことです。だから『金融経済』に載せた一連の論文が私にとって第1の系列。それからもう一つの系列は、信託協会に『信託』という機関誌があるんですが、これに連載した一連の論文です。この雑誌は、普通、信託の業務的な論文が多いんですが、原稿が足りなくて投稿して貰えないかというのが始まりです。それから常連になってしまい、1961（昭和36）年から70年にかけて、続々と12本書いています。それらは編成し直して『本邦信託会社の史的研究』という本を、来年の2月に日本経済評論社から出します。それ以外にも信託業史の論文は、『金融経済』と『信託』に次々と色々な形で出しています。

ところで私は信託業史をやる時に、一つの枠組みを想定したわけです。どういうことか言うと、日本信託業の歴史を分析したものがなければ、日本信託業全体の動きを時系列でとらえていくということ、これは業界全体の歴史、つまり信託業史という形になると思うんです。その他に、個別的に一つ一つ設立から消滅までどう活動したかという、個別の信託会社史があってもいいと。だから全体を見るのは横系、一つ一つの会社を洗いだしてそれを追いかけていくと、これは縦系だと。横と縦とを組み合わせると、全体像が明らかになるであろうと。経営史でいうと信託会社経営史ですね。それが可能なのは、信託業の認可をとった会社というのは、数十社しかないからです。信託会社を名乗ったものは数百社ありますけれども。数十社くらいだったら片っ端から洗い出して、個別的に信託会社経営史をやったらどうか。その中には財閥系もあれば、大銀行資本系もあるし、証券系も、地方の信託も、いろいろなものがあるんです。そういうものを縦に一つ一つ洗い出していく。そうすれば、縦と横という枠組みで、網羅できるはずである、と思ってやってきました。それまでに書いた横系に当たるものは、「本邦信託業の集中過程」から始まって何本も貯まりましたから、これを『日本信託業発展史』という形で、まず有斐閣から1969（昭和44）年に出しました。横系の続きとして戦後が書いていませんから、戦後はこれからやらなきゃいけません、後で触れる『住友信託銀行五十年史』である程度業界のことを書いてますから、それも横系の方になるでしょう。縦系の方はどうかというと、これは後で出てきますが、別な一連の執筆として、銀行を辞めて専修に来てからもずっと続けているものがあります。

- ◆質問 『日本信託業発展史』は確か大学院時代に読んだ記憶があります。信託など何も知らなかったのに、「金融資本」を研究するにはこの分野も見なければと思ったのと、とくにオリジナルな資料を駆使しつつ実証的に分析されていく手法に感心いたしました。この点はともかく、当時の状況で大学の先生でもない民間人が学術書を出版するのは大変だったと思いますが。
- ◆麻島 その通りです。処女出版の『日本信託業発展史』は有斐閣からですが、本当にラッキーでした。これにも経緯があります。というのは、浦高の同級生に江草忠允君というのがいて、有斐閣社長の江草四郎さんの長男で、親のあとを継いでのちに有斐閣の社長になります。

当時専務だったか、江草君に本を出せないかと相談したら、「まあ検討するから持ってこいよ」ということで受けてくれた。編集者は池淵さん、東大経済の2年先輩になる人なので、若干内輪話もしてくれた。後で池淵さんから話を聞いたら、有斐閣としては、こういう本を出していいかどうか、ずいぶん迷って検討したとみえます。江草君が編集会議で、私のことを色々と言ってくれたらしいのですが、「麻島君が今度本を出す」と言ったら、江草四郎さんが、そばにいて「君はどうして『君』呼ばわりするのか、麻島先生と言いなさい」。みんなの前で言われてね、彼は「麻島先生は」と言いなおしたという、それを池淵さんから聞いた。たとえ友人であっても、やはり出版をする時には、先生と呼ばなければいけないということをみんなの前で言われて、江草君が恥をかいたという、そういう話を聞かされて、公私の区別をつけさせる江草四郎さんはやっぱり偉いんだなあと感じました。

とにかく江草君、池淵さんがよくやってくれて、処女作としては500頁弱の大冊を出すことが出来ました。さすがに有斐閣、編集者が内容を吟味して忠告してくれ、校正が厳密、印刷所もいい、やはり本はいい出版社から出すべきものだと教えられました。

私はサラリーマン時代、意識的に一貫して研究と仕事を峻別しました。会社の名前が出ると、会社から文句が出るかも知れない、もっと仕事をしろと。だから自分の研究論文は個人名でしか出さない、一切会社とは無関係である、という筋を通そうと努力しました。結果的には文句を付けられずに済みました。

そしてもう一つは、時論は書かないと言うこと。研究として時事問題をやると、情勢がどんどん変化すれば、その論文はすぐに使いものにならなくなったり、意味がなくなる。だから時論はできるだけやりたくない。歴史研究ならそういうものと違うから、きちっとした実証研究をやれば、永久にそれは残るだろう。そう意識して、時事問題と歴史研究はしっかりと区別した。銀行の方からも、歴史研究についてとやかく言わせないと思ったし、また言われなかった。信託業の歴史研究は誰もいなかったので、むしろ信託協会からはどんどん書いて下さいと歓迎されました。それでいい気になって書いていたという面も有りますけれど。以上が信託業史を開始した経緯です。

③学会・研究会への参加

◆質問 先生は早くから学会でも活動されていますね。

◆麻島 確かに私は学会にも割合早く入っているんですね。多分1961年頃だと思うんですが、『金融経済』に論文を幾つか書いたので、多分誰かの推薦で、まず金融学会に入りました。大学の学者ではないけれど、業績があるということで、紹介者が推薦してくれたと思います。次に入ったのは証券経済学会なんです。この二つの学会に、かなり私は真面目に出席しました。研究会なり、大会が土日ですから、これなら休まなくても行かれました。おかげで金融論とか、

金融史の関係の人たちに学会を通じて結構面識ができました。昔は金融史の報告も結構あって、行っても面白かったんですが、最近は数学的なものが多くなったり、細かい技術的な話が多かったりするんで、さぼり気味です。若い時の私にとって学会は、耳学問出来るいい場だったと思います。自分が知らない分野の報告を聞いて、学問の世界も広いなとつくづく感じましたね。

会社勤めの傍ら、幾つかの研究会に私は出ていました。土日とか夜やっている時には出られるわけです。一つは金融経済研究所での、法政大学の金融論専門の渡辺佐平先生が中心になっていた研究会でした。そこでは交詢社の『現代日本産業発達史』の中の『銀行』、それをみんな担当して輪読、討論したり、柴垣和夫『日本金融資本分析』もここでやりました。私も分担を与えられて、報告をし、議論した。『金融経済』にはずいぶん論文を書いているものだから、研究所のみなさんとは顔見知りで親しくなっていました。商学部にいた今田治弥さんも金融経済研究所出身ですし、経済学部の高橋七五三さんも土方さんも金研の出身ですね。杉山和雄君も金研にいたことがある。金研は随分多くの学者を出していますが、いい勉強の場でした。

変わっているのは、大塚久雄先生の研究会にも出たことです。先生を中心に大塚門下が、文部省の科研費もらって研究会をやっていた、そこに来ませんかと先生から誘われて、私はこのこと出て行ったわけです。その経緯が振るっているんですね。柳川先生と大塚先生は卒業年度が違うが非常に親しい仲です。大塚先生が転居するという時、柳川先生から私に声がかかってきて、「いい物を世話しなさい」というわけです。そこで不動産部の人に頼んで、大塚先生の物件を斡旋して差し上げた。そうしたら大塚先生が私に好意をもって来て、そういう研究しているのなら、私の研究会に来なさいということになった。そこに行くようになったら、大塚門下の人々に面識が出来た。経済学部には長幸男さんとか、神奈川大学の内田芳明、学習院の北条さんとか、関口尚志さんとか水沼知一、山之内靖さんたち、いわゆる大塚門下ですね。私はやることがないから信託業史を報告したり、おまけに合宿研究会まで行っているんです。八王子のセミナーハウスに。この参加を通じて、大塚先生の本当の姿、話っぷり、みんなに対する指導の仕方を知ることができました。非常に敬虔なクリスチャンですからね大塚先生は。足が不自由でしたが、人格者であって、多くの人をマネージする立派な人だなあという印象を持ちましたね。のちにととう大塚久雄さんの全集を買ってしまいましたが。

もう一つ重要なのは、地方金融史研究会です。これには私もかなり長く関与していたわけです。それは土屋喬雄先生を中心に作られた研究会ですが、肝煎り役の杉山君から発足時に勧誘されました。こっちも忙しいし見送ったんですが、少し経ってから、何かの関係でまた誘われ、結局遅蒔きながら参加しました。

地方金融史研究会というのは、土屋先生が日銀に関係されている傍ら、地方銀行協会に助言

したりという中で『地方銀行小史』という本を出された。それは小史とはいうものの、土屋先生、杉山、寺谷氏の3人で書き、一応よく書けている本なんです。それが縁になって、地方銀行協会は土屋さんを中心とする研究会を援助してくれたわけで、若手研究者をいっぱい入れて研究会が成立した。

そこには日本銀行から成蹊大学に行って今東洋英和女学院大学学長の朝倉孝吉さん、勸銀史をやった弘前大学の拜司静夫さんとか、金融論の今田治弥さんとか、そういう先輩もいたし、同輩クラスでは、駒沢大学で金融論の渋谷隆一さん、経済学部にいた経済史の加藤幸三郎さん、貯蓄銀行史の茨城大学にいた進藤寛さん、日本大学で金融論の岡田和喜さん、ほかにも何人かいるんですが、いっしょに定例研究会をひんぱんにやり、合宿もやる、かつその後の飲み会もずいぶんやりましたから、研究だけでなく飲み友達にもなっている。そういう縁で渋谷さんとは、深い仲になって今でも付き合っています。今年渋谷さんが古稀を迎え、駒沢大学を定年退職することになり、出版記念も兼ねるパーティがありました。私も頼まれて挨拶させられましたが、断れないほど非常に親しい関係が出来ています。

もう一つ変わり種がありまして、友人たちと資本論の読書会をやりました。これは川村・原田先輩、杉山君と、太田さん、赤城さん、あとの二人はのちに国民金融公庫の理事や監事をやった人達でした。太田・赤城さんは、原田さんが国民金融公庫に最初に就職して知り合った仲間で、二人は一高での親友なんですね。川村、原田、杉山と私は浦高、したがって浦高一高の連合軍で、資本論やろうと。この読書会は、もちろん長谷部の翻訳を使うわけですが、真面目に資本論の第1巻から始めました。原田さんの家に集まって、夜やるわけ。当番決めて順番にやるんですが、難しい難しい。私は早く第3巻の信用のところまで行って欲しかったんですが、ついに刀折れ矢尽きて途中で終わりました。けれども数年やりましたね。この頃、資本論だけでなく、浦高時代に啓発されたためか、マルエン選集などを買ってかなり読みました。これも勉強後のおしゃべりや飲むのが楽しみでした。

こういう幾つかの外部の研究会、まあ土日だからよかったですけど、時には休暇をとって行きましたね。私はさっき申しあげたように、商業学科出身でかつ大学院で勉強したことがない。経済史とか金融論の分野を最初から正攻法でやったわけではない。ですからそういう面での学問的な議論になったり、あるいは学説、論争なんかの細かい点になると、そういう点は勉強してこなかったな、と思う。体系的に最初から勉強した人とギャップがあるな、と思わざるを得なかった。だから遅滞しながら埋めようと思って、自分なりに専門分野の勉強を開始しました。

◆質問 先生の研究仲間というか、先生が参加されている研究会には講座派系や大塚史学系、労農派や宇野派系とあり、特定の学派にとらわれずに実証分析を進められたのが先生の学風と思っていますが、それでも次第に宇野派の影響が強まっていったという印象を持つのですが。

◆麻島 それにはこういう経過があります。前から日本資本主義論争は若干知っていましたが、それまで読んだのは大体、講座派系のものが多くて、おそらく川村さんや原田さん達と何かやっている内に影響されたのかも知れませんが。明治維新論や敵マニユ論争などをわからないなりに読んでいましたから。今から思えば講座派の立場でしたね。しかし研究会で議論したり、自分で読んでみるうちに今度は労農派の方、とくに宇野シューレに興味が出てきました。読んでみてだんだん面白くなって、宇野理論に関連するものを、読むようになっていきました。

考えてみると幾つか関係した研究会の中で、地方金融史研究会には両方の方がいましたけれども、親しい友人が講座派を離れて、宇野理論の方に属しているし、大変深い関係になる加藤俊彦先生が、元々宇野理論ですからね。そういう人たちと付き合っている内に多少は感化されたのかなあと、自分でも思わざるを得ない。けれども興味がそちらに傾いたことも事実なんです。ですから宇野先生とは面識ありませんが、『経済学方法論』はもちろん、それから『経済政策論』や『恐慌論』も買い込み、大内力さんの『日本経済論』を、結構何回も読んで、原理論、段階論、現状分析という宇野シューレの枠組みを自分なりに一生懸命かじりました。しかしどうも最初に理論ありき、というのが馴染めず、無理に分析を理論の枠に押し込む、あるいは結論を予め決められた方向に持っていくというのにはついていけません。資料に基づいて実証していく、誰もやらなかった未開拓の分野を埋めていく、それはファクトファインディングにならざるを得ない。大学院で誰かに師事したわけではなく、強制されることもなかったから、実証分析の実践に没入してしまった。

それと同時にもう一つやったのは、ヒルファーディングの金融資本論。金融史をやると、それが気になってきて読んでみた。そうすると金融資本のそれぞれの国における成立の仕方に興味が湧いて、生川栄治『イギリス金融資本の成立』とか、戸原四郎『ドイツ金融資本の成立過程』とか、石崎昭彦『アメリカ金融資本の成立』とか、呉天降『アメリカ金融資本成立史』もありましたね、そういう一連のものを集めて、一応目を通してみました。

しかしながら、やはり本命になったのは、加藤俊彦『本邦銀行史論』と、柴垣和夫『日本金融資本分析』、志村嘉一『日本資本市場分析』のような、いわゆる労農派に属する人たちの著作であって、自分の研究にオーバーラップしていたから、読んで裨益もするし、あるいは同感もして、その上に自分も乗かってゆくことになってしまった。だから、最初の講座派的な認識が次第に労農派の方に変わったというのが、私の大まかな流れになるんですね。

◆質問 それにしても勤めながらよく研究時間がありましたね。

◆麻島 そうなんです。私に関係のありそうな学術書を読むのは、私にとっては結構難しいですからね、時間がかかる。会社勤めしていますから、昼はできません。当然、土日あるいは夜にやる、ということになるんですが、通勤時間もフルに使いました。どんなやりかたかという

と、最初は井の頭線の三鷹台にいましたから、吉祥寺で乗り換えて、東京まで中央線で行くんですが、荻窪からの始発電車がありました。だから始発電車に乗れば座って本が読める。帰りは東京駅から乗るから当然、座って読める。それで早めに出て、荻窪駅のホームの列に並んで始発電車を待つ。鞆を下に置いて、赤鉛筆を持って、本に一生懸命アンダーラインしながら、電車が来るまで並んで待つ。電車に乗れば座って東京まで読める。ところが通過する電車からホームの私を見てる奴がいるんですね。会社行くと、「また荻窪で立ってなんか読んでましたね」なんていわれる。見られても仕方がない、まあいいや、ということですね。他の人たちはよく電車で立ちながら碁の本を読んでました。碁の手筋を勉強しているんですが、当時の私はそんな余裕なんか無いな、と思わざるを得ませんでした。国立に移ってからは、武蔵小金井始発の電車で同じことをやりました。

会社でも誘いがずいぶんありましたが、ゴルフと麻雀は一切しなかった。徹底して断りましたね。いわゆるレジャーというのはあまり行かなかったから、若干付き合いが悪かったかも知れませんが。その代わり酒を飲むのは付き合いで、サラリーマンらしく上司の悪口を言ったり、部下と飲んだりしましたが、それ以外の時間というのはフル回転で勉強し、原稿を書き続けた、とまあ言っても良いでしょう。だからどうしても家庭サービスは不十分になりましたね。

私はみずから「二足の草鞋」と称していますが、一方では会社の仕事は一生懸命やらなきゃならない。そちらもまあ一生懸命やったんで、いわゆる昇進とか評価というのは、結構いい線を行ってました。上司がこのまま行けば重役にはなれるな、と云っていましたが、私自身もある程度の所までいけるという自信は持っていました。しかしきついことは、きつかったですね、仕事と研究のタイムシェアリングが。

④滋賀大学附属史料館との出会い——滋賀県金融史の開始

◆質問 地方銀行史の研究にも早くから取り組まれていますね。

◆麻島 私の地方銀行史との取組は、滋賀大学保管資料との出会いからです。最初が1960年頃ですから、かれこれ40年も続いています。滋賀大学の経済学部附属資料館というのがありまして、そこに今は滋賀銀行になりましたけれど、合併前の百三十三銀行と八幡銀行の銀行帳簿が保存されています。そのことをある時に知ったんですね。そのきっかけは高橋久一さんのお陰で、その人は滋賀大学の図書館にいまして、半分図書館の人であり、半分学者でした。この高橋さんが『彦根論叢』に銀行帳簿の紹介を書いたのを私は目にしました。そこで私はわざわざ滋賀大学を訪ねに行って、いろいろ話を聞き、銀行帳簿の現物を見せてもらった。これを使ったいろいろな研究が出来そうだと直感しました。しかし当時の私は信託がメインでしたから、近江信託という滋賀県の信託会社の資料が有るだろうと思ったのですが、それは無かった。近江信託は滋賀銀行に合併されましたから、おそらく滋賀銀行にあるだろう。そう思って次に滋賀

銀行にまで押し掛けて、コネを頼って見せてもらうことができた。この出会いから高橋さんとは懇意になり、数年前に亡くなられるまでお付き合いをした。大変朴訥な親切な好人物でして、この人とは話がよく合って、とても良くしてもらった。高橋さんはその後大阪大学に移ったり、神戸大学に移ったり、追手門学院大学の教授になりましたが、ズーと資料的な面ではお世話になった。私をずいぶん高く評価してくれましたし、私も高橋さんに恩義と親しみを感じています。私は、高橋さんが大阪大学へ移った後も、滋賀大学へ通い続けました。というのは地方金融史研究会で私も地方銀行のことを研究し始めたからです。

のちの話になりますが、専修大学に来てからも、個人研究費で毎年、1回か2回は出張して、銀行帳簿と格闘して、論文を幾つも書いています。そこには何があるかという、さっき申し上げたように、八幡銀行、百三十三銀行、近江貯蓄銀行などの帳簿が大量に所蔵されている。所有主の滋賀銀行から寄託されているわけですが、私の知る限りほとんど研究上使われていなかった。これを使うには、ある程度帳簿の仕組みとか会計処理とかの知識が必要ですが、歴史家は会計が苦手なんですね。私は財務分析もやった経験もあるし、自分で会計学も少しは勉強したもんですから、帳簿や会計処理についてある程度分かる方なんですね。

これはオフレコですけど私も、若い時代に税理士の資格を取っちゃおうと思って、税理士試験を受けて何科目か取っています。大学の教員で経営学だと言うと、免除科目が有るでしょ、そういうの全部集めると税理士の資格が貰えるかも知れない。若い時に税法とか財務諸表論とか、簿記を勉強して、結構知っているんです。銀行帳簿の分析にはこの知識が役立っています。歴史家の中では、金融や会計がわかる方なのかも知れません。あとは時間と労力を惜しまないでやるかどうかの問題です。銀行帳簿との取組も、最初はマイクロフィルムで撮って、それを焼き付けて、それを見ながら分析してゆく、と言うことをやりました。ですから、大きな15キロぐらいの携帯用撮影機を中古で買って、それを持って滋賀大学に行きましたね。15キロといっても持ち運んでいると、だんだん重く感じられて、うんざりしたことが思い出されます。

ついでに後の時代も含めて、地方金融史として何をやったかをここで説明しておきましょう。滋賀県の銀行に関して、私の業績目録にかなりたくさん論文がありますが、戦前期地方銀行自体の事例分析はもちろんですが、我が国の預貯金の形成を実証したいのです。日本で預金とか貯金とか言われるものが、明治から大正、昭和とどう形成されて来たのか。銀行の貸出面の分析は若干ありますが、資金源泉の実証分析は、ほとんどやられていない。いったい日本の定期預金を中心とする預金構成が、どのように形成されたのか、それにはいったい誰がそういう預金をしたのか、預金者の分析にまで踏み込まなければ証明できない。当座預金だったら信用創造と言う形で、当座性預金のかかなりの部分が説明できるでしょうが、本源的な預金である定期預金は、誰から集めたのか証明する必要がある。預金者、資金の性格が預金種類毎に違う

のか。それを証明するには、銀行の帳簿から洗い出していく必要がある。そのためには銀行帳簿が存在しなければ出来ない。滋賀大学には地方銀行ではあるが、手懸かりになる銀行帳簿が残存している。私はこう考えて、百三十三銀行や八幡銀行の帳簿にアクセスする決心をしたのです。銀行帳簿を良く調べれば、個別に預金取引が分かるわけです。それを入手して、コンピュータへ個別データを入力し、計算し、分析して、論文を書く。入力までが気の遠くなるような作業で、根気と労力が要りますね。

◆司会 口座数はどれくらいになるのですか。

◆麻島 口座でいえば何千という単位ですね。しかし一つの口座で幾年にも亘り、預け入れ、解約があるわけですから、個別取引データとしては簡単に数万、十数万になります。前に八幡銀行の定期預金取引を入力した時は、短期間に限定しても4万件以上でした。小さな作業でも数千件です。

私の地方金融史の研究のうち、預貯金形成に関する分析では、第1に、いくつかの八幡銀行の定期預金の分析についての論文があります。その銀行の明治以降の定期預金についての分析ですが、まだ続いています。実は定期預金だけでは駄目なんで、小口当座預金、つまり普通預金ですけど、その分析とか、さらに当座預金の分析とか、貯蓄預金も含めて、全預金を二つの銀行（八幡銀行と百三十三銀行）で洗い出せば、他の銀行ではこういう帳簿は残っていませんから、まず、希有な分析になる。日本の銀行分析の中で欠けている部分がそれで埋まるならば、努力の仕甲斐があると思ってやっている最中です。

第二に、二つの銀行を素材にして、貸出面とか、有価証券投資とか、資金運用の方の実態も分析するつもりです。貸付金の帳簿があったり、証券の帳簿があって、中身が分かりますから、いずれ資金源泉の分析と資金運用の分析を重ねれば、一応、滋賀県の有力地方銀行、現在の滋賀銀行の前身の実像が明らかになる。

これができたら日本の地方銀行の事例ではあるが、日本の預貯金形成について、地方銀行の金融的役割について、何か大きなことがいえるだろうと思っています。そして片や信託会社の金銭信託の実証分析をやっていますから、定期預金と金銭信託の比較もやって、日本の定期性資金の実態に迫りたいともっています。

ついでにコメントしておきたいのは、歴史分析におけるコンピュータの使用です。銀行帳簿から得たデータの処理は、最初は自分自身手作業でやっていましたが、数千件を超えると手に負えなくて、大学の電算機を使いましたが、今はパソコンで間に合うようになりました。ただ入力作業は、自分では到底出来ないので、外注していますが、計算や分析はパソコンで出来るので、時代の流れを感じますね。これまで銀行史の分析は、決算期末の残高ベース、つまりストックの分析しかやってない。それを一歩進めて、私はフローの分析をしようと考えた。帳簿

記載の取引を、つまり預金してから解約するまでの全期間を“積数”まで計算して分析すると、量的な把握が可能になってくるんですね。大きな金額を短期間だけ預けると、それより少額でも長期に預ける方が、積数を計算すると大きいこともあり得る。積数の方が実態により接近できるという考え方です。コンピュータによって、入力次第ではその計算が可能になった。最近の私の論文は、積数計算を実行しています。

従来の残高分析だけでなく、損益計算の分析もやる、積数計算もやる、今までの金融分野の歴史分析は残高分析しかやっていないから、新しい境地が開拓出来ると思っています。今のところまだやってる最中。おそらく、定年になってもまだこのまま続きそうです。

以上のような地方金融史の研究をサラリーマン時代に開始して、途中までやった段階で専修大学に移り、今日まで継続してきたと云うことです。

◆質問 先のことになります。先生は専修大学にいらしてから、関心の中心はどちらかというところと財閥史の方にかなり片寄って来たのではないかと思います。地方金融史の研究は先生の方角性の中でどう位置づけられるのでしょうか。私としては、その研究をどういう形でこれからおまとめになるのかを聞きたいのですが。

◆麻島 今いわれたのは滋賀県の金融史のことでしょう。一次史料である帳簿から積み上げていく実証ですが、一定の分析方法を必要としますから、私でなければ出来ない面がある。私の存命中に成果を出しておきたいと思っています。やる以上は自分なりの視角を設定し、他人がやらない分析方法でオリジナリティを出したい、大量なデータ処理をするので結構くたびれます。年を取ったので、少しペースを落としてやらざるを得ないと思っています。専修大学を定年になったら暇が出来るでしょうから、滋賀大学に行って続きをやるつもりでいますから、何年後かに決着がつくだろうと思います。

⑤専修大学での信託論担当

◆質問 本学の専任教員になられる前、銀行員時代から教鞭をとられていますね。

◆麻島 そうです。この時代の最後に触れるべきことは、専修大学で信託論を担当するようになったことです。1968（昭和43）年から本学の商学部で信託論を最近まで32年間担当しました。これも柳川先生の薦めでやるようになったんです。先生の所にいつも抜刷を持参して話してるうちに、「君もひとつ大学で教えてみないか」「お任せします」と云うことになり、先生が本学の商学部に話をしてくれたらいいですね。

柳川先生は大河内一男教授より2年ぐらい上ですが、非常に親しい仲なんです。大河内さんは東大教授兼任で、本学の学長をやっているんですね、戦後。本学は戦後再建期に、大河内先生とか柳川先生の世話になっているはずですよ。だから柳川先生は本学でも顔がきいたのでしょう。そこで商学部で信託論の科目を作って、私が担当することに、お膳立てをしてくれたらし

いですね。私は信託のことは大分やってきましたから、お任せして信託論の講義を始めたのが1968（昭和43）年でした。

4月に新任教員の辞令をもらうので大学へ行ったら、二瓶敏さんが広島大学から同時に入ってきたんですね、助教授で。あれ何だ、ここで一緒かと驚きました。二瓶さんは浦高の理科出身で、1年上ですが、東大の経済学部では私の方が先に卒業した。経済学部時代に知っていますが、私の知っている二瓶さんは、痩せこけて精悍な感じだったのに、再会したらかなり太っちゃってね、お互いにすぐ分かって、「やあ」っていうことになりました。私の非常勤時代はあまり会いませんでしたが、のちに私が専任になってからは顔を見るが多くなりました。

商学部の信託論は、最初、神田校舎でやましてね。初年度は数十人でしたが、翌年から700人ぐらいに増えてしまって、大教室が一杯なんで驚きました。採点が大変でしたが、学生の感想を聞くと、外部から来て一生懸命やっているのがわかるというので、評判が良かったらしいですね。このままやっていったら多すぎて大変だなと思った記憶があります。授業はウィークデイですから、教えるには銀行のトップの了承を取らなければならない。話をしたら、一応よいだろうということになって、そうなるとおおつびらで行けるわけですね。だから時間割に合わせて銀行を抜けて神田校舎に行く、のちにはこの生田に来る。その代わり非常勤講師の報酬は、全部会社に納入して、私は一銭も貰わない、ということでやりました。丸の内から神田へ行く時は簡単でしたが、生田に移ってからは遠かった。銀行での地位も上がっているので、3限に間に合うように会社の車で生田に駆けつけました。最初は世田谷通りというんですね、あれを来るとけっこう時間がかかるんです。後になると東名高速ができてそれで来るから早くなりました。昼休みに銀行を出る時、サンドイッチと牛乳を用意して貰って、車の中ですませて、それで授業をやって、待っていた車で銀行に帰る。そういうことをやっていたから、あんまり他人に見られたくないな、と思ってね。正門前で待っている車にこそそと乗って帰りましたよ。（笑い）

商学部の非常勤講師は9年やりました。専任になってからも信託論を持ち続けましたから、数えてみると今日まで32年間担当したことになるんですね。ある時信託協会が全国の大学を調査したことがありますが、信託論をやっている大学がいくつあるかと数えたら、信託法はけっこうあるんですが、経済での信託論はほとんどなかったですね。だから全国的にユニークな存在だったと自分では思っています。

その後、あまり多いのは大変だし、専任としての負担がありますから、信託論をだんだん厳しくしたら人数が減りました。100人になったり、最後は70~80人ぐらいで済むようになったから、それでずーとやってきたんです。ところが、今年の4月に、今年は何の教室が割り当てかと時間割を教務に貰いに行きました。そしたら商学部担当の課長が「先生の科目はもうあり

ませんよ」と云うんですね。「ええっ、全然聞いてないけど」と云ったら、「小さな紙がいつも行くでしょ。今年はなかったでしょ」というわけ。要するに、毎年新学期前に担当科目を記載した小さな紙を教務から渡されます。商学部からそれが来ないと云うことは、担当がないということだ、と云う意味なんです。毎年続けているから形式的に貰っているだけで、それ程気にしていなかったから、来ないことに気が付かなかったわけです。どうしてないのか聞いたら、「先生ね、信託論はカリキュラム改正で廃止になったんですよ」と。「そんなこと、今初めて聞いた・・・」。一言の断りもなく廃止しておいて、時間割を聞きに行ったら、もう科目が無くなっていた、やっている本人が知らないうちに無かったっていうのは、ずいぶん失礼な話だ。さすがの私も頭に来ましたね。それから課長では仕様がなから、商学部長にその話をしました。私の言い分は、カリキュラムの変更は商学部の問題だから、やめるのは仕方がない、やめるなら外部の非常勤の私に、なぜ一言事情を説明しなかったのか、私は32年間も商学部のために教えてきたのだから、長い間ご苦労様の一言ぐらいあってもいいじゃないか、ということなんです。商学部長はすぐに事情を調べてくれて、「カリキュラムを変更する時に、お断りしなかったのは本当に申し訳なかった」と謝ってくれたので、私は「商学部というのは随分失礼な学部ですね」と嫌みを云っておきました。陳謝されたからそれ以上追及しませんでした。33年目に定年になるから、その時に廃止するなら気持ちはいいけれど、カリキュラムの変更は随分前からやっているはずなのに、何で一言もなかったのか、という思いは消えず、信託論最後の幕切れは、残念ながら大変後味の悪いものでした。

⑥東大で「経済学博士」を取得

さて、信託論を本学で講義しながら、1972（昭和47）年11月に東大で経済学博士の学位を取得したのですが、これも柳川先生が、「君、もう出してみないか」と言われたのがきっかけです。その前に『日本信託業発展史』という処女作を出版していますから、それが主論文でよかろうということでした。旧制度では学位論文だけで済んだのが、新制度では大学院修了を前提としています。私は大学院を出ていませんから、学位の審査にあたって、経済学の素養とか、語学は2カ国語必要とか条件が有るんですね。私の場合は、大学でも非常勤で教えているし、幾つも学会の会員にもなっているし、それから主著はもう出ているということで、経済学の素養はパスするけど、外国語は試験をやらなくてすむように、事前に翻訳でもやったらどうか、と示唆されました。私の業績目録に翻訳が何本かありますが、そのためのものです。英語の翻訳の方はある程度できますが、問題はドイツ語です。私はドイツ語が第二外国語でしたが、卒業以来全然やっていないからすっかり抜けてましたね。これでは仕様がなから、アー、ベー、ツェー、デーからもう一回、初歩からやり直しながら、そのうえでドイツの信託文献を翻訳したんです。まさに毎晩、四苦八苦して翻訳をやって、実績を作ったわけなんです。副産物としてド

イツの信託業を勉強することができ、信託論の講義に取り入れることもできました。

結局、学位請求では『日本信託業発展史』を主論文にして、副論文を20ぐらい選んで提出したことを思い出します。安田講堂の中に受理するところがあって、風呂敷包みいっぱい、3部ずつ用意しなければならないから大変でしたが、持ち込みました。当時、課程博士は半年、私のように論文博士は1年が審査期間と聞きました。しかし提出をしても何も声がかかって来ないですね。あとで聞いたら、本当かどうか分かりませんが、受理しておいて間際になると、「もうそろそろ期限だぞ」と大急ぎで審査して面接するもんだと聞かされましたが。

主査が加藤俊彦先生で、副査が安藤良雄、館龍一郎、柴垣和夫、石井寛治の5人の先生。普通は3人ですが、東大だけは5人です。柴垣・石井両氏は私より後輩ですが、専門分野の関係で副査になったのでしょう。柳川先生が加藤先生に、やはりあなたのところがいちばん適当だろうということで話をしてくれて、加藤先生も私のことをよく知っていたから、引き受けて下さったということなんですね。

口頭試問では大変時間がかかりましたね。3時間くらいかかったかな。もう矢がいっぱい飛んてくる。だれが矢を飛ばすかという、安藤さんと館さん。突込んでくるんですよ、やはりね。外部から受ける者には厳しいんだそうです。たとえば、会社の社長が学位を請求すると、本当に本人が書いたのか、部下の代筆ではないのか、どんどん質問されて答えられないと、「こりゃあ、だめだ」ということになる。だから外部の人、民間の人が出すと厳しいということ、あとで聞きました。とにかくずいぶんいろいろ聞かれました。私も緊張して臨みましたが、本当に3時間、くたびれましたね。でもおかげさまでパスしました。

◆質問 館さんはどんな質問をされるんですか。分野がちょっとずれるでしょう。

◆麻島 館さんのほうはやっぱり金融の立場ですから、金銭信託の性格や信託業務のことでしたかね。安藤さんの方はやっぱり経済史ですから、金融史として信託会社のことを、「あなたはどう考えて書いたのか」とかね。そのぐらいしか今思い出せませんが、でも柴垣、石井両君はなにも言いませんでした。遠慮して言わなかったらしい。

加藤さんが援護的で、いろいろと感想をいわれた。あとで審査の要旨を主査が書きますが、それを東大で見ました。加藤先生、良く書いて下さったな、と私は感謝しています。私に刺激を与えて下さった先生自身は、その後信託のことは何も書かれず、信託のことは麻島君に任せたと、私に云われていました。

その学位記なんです、幾日か過ぎて東大から電話がかかってきて取りに行きました。経済学部の事務室に出頭すると、係の人が筒を1本出して、「これ先生の分です」ってくれる。引き出してみると、A4くらいの紙に横書きで学位記が書いてあるんですね。私は友人の渋谷さんが東北大学から取得した学位記を見せて貰ったことがあるんですが、大きくて金箔で鳳凰か

なにかの縁取りがあって、縦書きの見事なものでした。それを学長自らくれるんだそうです。そういう話を聞いていたから、東大はなんて事務的なんだろうと唖然としましたね。

◆司会 専修だって立派な学位記ですよ。感激しなかったでしょ。

◆麻島 よく見ると「麻島昭一」という字も下手くそ。銀行に持って帰って、もちろん社長とか副社長に見せたんです。そしたらね、副社長が「や、おめでとう。しかしそれにしてもずいぶん貧弱だね。字も下手だね。」なんて言われちゃって、ちょっとがっかりしました。もうちょっとまともなものをくれれば、もっと有り難味があるのにな、と思ったですね。

でもおかげさまで、銀行では大変喜んでくれまして、銀行協会のホールで社長主催の祝賀会をしてくれました。その時には、金屏風を背に妻同伴で立たされ、面目を施しました。結婚式以外に、金屏風の前で祝って貰えるのは一生に1回かなと思いましたが。幾つかの新聞や雑誌に学位取得の記事が載り、ある新聞からは記者のインタビューを受け、大きな写真入りで書かれました。当時、金融界で博士は日銀の吉野俊彦さんぐらいでしたが、吉野さんは旧制度で取り、新制度での博士は私が初めてで珍しがられたのでしょうか。とにかく学位取得はその後いろいろ意味で役に立っています。

⑦『住友信託銀行五十年史』の編纂

◆司会 銀行時代のもう一つのお仕事として『住友信託銀行五十年史』がありますね。

◆麻島 そうです。この編纂も社会人時代のよい思い出です。この『五十年史』は1300頁の大冊です。それにはこういう事情がありました。30年、40年でも社史を作っていましたが、50年にも社史編纂の話が持ち上がりました。すでに信託の歴史を私はずいぶん書いていましたから、専門家と見られたんでしょう。奥平社長からじきじき依頼が下りてきました。引き受けるにあたり私は社長に直接交渉をしました。

どうしてかという、「私がやるとアカデミックなものになりますが、全面的に信用して任せただけならやります」「会社の方で内容にいろいろ条件をつけられるなら、私はご辞退いたします」とはっきり言ったんです。あとから考えれば、サラリーマン社会で社長にずけずけと条件をつけるのは非常識なことでしょう、普通なら云いませぬ。上から命令されれば黙って有り難く受ける。しかし当時の私は、サラリーマンではあるけど、「2足の草鞋」で歴史家の自負を持っていたし、何よりも銀行史のあり方や水準は研究上よく知っていましたから、やる以上はちゃんとしたものを作りたい。そのためには自分の思う通りにやらせて貰いたい。そこで直談判をして、生意気だとかいわれたら、会社も辞める覚悟だったんですが、社長は少し考えて「それじゃ、君に全面的に任せる」といわれた。この社長は立派な人で、此の問題も大局的に理解できる人でした。

◆質問 日本では「社史」というと個人の仕事としては評価されないものが多いようですが、

これは先生が書かれたもので、「社史」としても客観的・実証的で貴重なものだと思います。

◆麻島 そういっていただくと嬉しいです。全くの自作自演で、実質上、著書だと思っています。普通は企業の社史といえば、編纂委員会を作って重役がずらっと並んだり、部長が並ぶというのが多いんですね。それは一切やらない、私が編纂委員長であり、オールマイティーだ。あとは部下として若い人だけほしいと。その結果、希望通り課長代理ともう一人若い人と、あと女性2人、4人の実働部隊を編成しました。

全社に通達を出してもらって、麻島が全部やるから協力なさい、と。一般には、社内に分担執筆を頼み編纂室がまとめるというスタイルも多いのですが、最初から私が全部書くつもりでした。その代わりに自分が全責任を負うということで、実際に200字の原稿用紙で5千枚を私ひとりで全部書きました。これも実にくたびれた仕事でした。だからこの社史は、事実上自分の著作だと思っています。

会社の中を本店から始めて、あっちこっちくまなく、自分でも行って資料を探しました。前に30年史、40年史がありますが、素人の悲しさ、資料を探していないんですね。というより資料に対しての感覚がないから、探そうともしていない。私は歴史家ですから、実証するために徹底的に探す。たとえば本店の総務部の保管書類はもちろん、本店の地下に誰も今まで手をつけてないような、帳簿の出来損ないみたいなのがあったから、それも全部編纂室に引き上げてくる。それから倉庫がある独身寮に行ってみたら、捨てるために山になってる書類がある、かき回したら使えるものがたくさん出てきた。焼却処分を中止して引き上げてくる。もちろん支店にも資料提供を呼びかける。やはり探せば、いろいろと資料があるものですね、それもみんな持ってきた。

傑作だったのは、東京事務所の資料を使ったことです。前にも云いましたように、東京事務所は住友信託の東京の“眼”だったわけですね。東京探題として大阪の本店に代わって大蔵省とか業界と折衝する、その結果を手紙に書いて本店に送ります。昭和20年代では、長距離電話はまだまだ貴重でした。急ぐ内容はもちろんすぐに電話しますが、それでも後から確認のため、必ず全部文書にして送るんですね。本店はそれに対して指示してくる、東京事務所がまた動く、そして報告する、こういう慣行で動いていたわけです。社史のために本店を調べたら、本店では効率化運動で古い書類は皆捨てている。ところが東京事務所には残っていた。当時は、複写便箋といってカーボン紙の中に挟んで、強く書けば本紙と写しが出来る。東京から本紙は本店に送るが、写しは東京に残しておく、それが捨てないで残っていたことを見つけました。要するに、効率化の時代にも捨てなかったんですね。東京事務所には「さむらい」がいて、治外法権的というのか、ルーズというのか、効率化を無視していたのですね。それを全部引き上げてきた。

それを読んでみると、敗戦後のGHQとの折衝だとか、大蔵省とのやりとりだとか、全部赤裸々に出たわけですよ。これは面白い、喜び勇んで使いましたね。他の信託会社では本店自体が東京ですから、外部折衝を口頭で上に報告して済ませるでしょう。口頭だから何も残りませんね、わざわざ記録を書かない限り。ところが住友だけは、なまじっか本店が大阪だったために、貴重な記録が残り、結果的には大変役立った。

それから住友信託には重役、部長、支店長の会議があります。主管者会議といいますが、年に2回は開催される。そこでは当然、経営方針の説明、各部各店からの報告、討議がありますが、会議録はくれないものの、説明資料が配付される。これも主管者次第で、多くの人は溜まると効率化で処分してしまいます。私の前任部長には歴代なぜか捨てる人がいなかったの、私が部下として管理もしたし、部長になって全部引き継ぐことが出来た。それも使うことが出来ました。どこの会社の社史でも、この種の記録を発掘しなければ、いいものにはなりません。

また、現役の役員だけでなく、すでに会社をやめたOBとか、それから大蔵省の銀行局長だった人、他の信託の社長、信託の学者とか、そういう人まで、重要なことが聞けそうだと私が思った人には、積極的にヒアリングしました。そうしたら30人ぐらいになってしまいました。全部私一人でヒアリングして、テープ起しをして、読めるように修正して、ひとりづつ冊子にしました。社史ではそのヒアリングから随分引用して、肉付けに使いました。そしてご本人に副本を記念に差し上げたら、みなさん喜んでくれましたね。

以上のようなことを積み重ねたら、普通ではないようなアカデミックな社史ができました。あたかも数多くの論文を積み重ねたような内容になって、実証性の濃い内容になったと自負しています。念願の社会的評価、学問的评价に耐えるものを作れたと自分でも思い、本当に私としてはやり甲斐がありました。まだ次長の時に編纂委員長になり、副部長に昇格しても、調査部長になっても編纂委員長兼任で押し通しました。だから机が二つあって、部下と一緒に調査部長席と、編纂室の席と始終往復していました。専修大学の信託論も持ち続けていましたから、スケジュール的にも大忙しの生活でした。私が書いた原稿は完成するまで誰にもみせませんでした。最後に社長の指図で有能な副社長が目を通してくれましたが、ひとつもクレームはつきませんでした。全面的に信用してくれたのは有難かったですね。

『五十年史』が終わった時、社長が表彰してくれました。賞状と賞金を貰いましたが、賞金は部下に分配しました。

◆質問 この社史の完成まで何年かかったんですか。

◆麻島 スタートしてから4年ぐらいかかりましたね。部下が本当によくこちらのいう通りに動いてくれて、表を作ってくれたり、いろんな作業をやってくれました。だから、かえってそれでやりやすかった。

住友信託の社史でありながら、業界史にもなっていましたし、しかも実証的ですから、あとで大蔵省の役人が、良く利用するらしい。それで何かあると、電話かけてくるんですね。私に直接かかってこないで、住友信託に電話かかってくるんです。「こういうことが昔あったそうだけど、どうだったのか、麻島先生に聞いてもらえないか」とね。すると会社から私に照会の電話がくる。そんなの直接聞けばいいじゃないかと思うんですが、役人は沽券に係わるのか業者を使うんですね。

この社史は実証的なアカデミックなものでしたから、おかげさまで第1回目の優秀会社史賞を受賞しました。これは日本経営史研究所が創った賞で、今十何回になってると思います。2回目からは2年間に刊行された社史をふるいにかけて、賞を出す。第1回はそれまでの何年間かの社史から選ばれたと思いますが。

私が専修大学に転じた最初の年に、経営学部でお祝いしていただきました。溝田先生は立命館から経営学博士の学位を取り、桜井先生は学界賞を取り、私は優秀会社史賞ということで、学長も出席して3人を祝ってくれたことを思い出します。

⑨社会人としての「2足の草鞋」

◆質問 社会人時代を総括するとして、まとめていただければと思いますが。

◆麻島 私の社会人時代の最後として言いたいのは、私の履いた「2足の草鞋」についてです。会社の仕事と自分の研究とを、ある意味では並列させたこと、サラリーマンと学者の並列、それを「2足の草鞋」と表現したいのです。その大先輩が居るわけですね、吉野俊彦さん。ご存知の通り吉野さんは、日銀の人でしたが、森鷗外の研究でも有名です。森鷗外はご存知のとおり軍医であり、小説家でもある。まさに鷗外は「2足の草鞋」。そして吉野さんも森鷗外を研究して数多くの作品を書き、日銀では理事まで昇ったから、やはり「2足の草鞋」。おそらく吉野さんも森鷗外を「2足の草鞋」の先輩だと思ってる。私はまた森鷗外も、吉野さんも両方とも「2足の草鞋」の大先輩だと思っています。なにかで吉野さんにお会いした時から、抜刷や本を差し上げるようになり、だんだん懇意になりました。吉野さんには日銀時代も、山一に行かれてからもも、何度もお訪ねした。私が住友信託をやめる時にも、吉野さんはわざわざ声を掛けて下さって、パレスホテルでご馳走してくれました。「まあ、辞めて行くのもいいんじゃない」ということで、消極的な賛成をいただいた。その時、私が吉野さんに反問した。「吉野さんは日銀やめられたら、学者になられるとびっくり思ってたんですけど」といったら、「いや私はそれは嫌だったんだ」と。「なぜかというね、車がない、秘書が居ない、これは私にとって大変つらいんだ」と。「だから、山一行ったのも秘書はくれ、車もくれ、そういうことが自由になるからっていう条件で私は行ったんですよ」なんてね、笑いながら話してましたね。確かにその後私も専修大学に来たら、俄然、部下も車も何もなくて、全部自分でやらなく

ちゃんらない、吉野さんの言葉が良くわかりました。私は大学時代、吉野さんが東大に特殊講義で来られたのを聴講しましたが、吉野さんの「2足の草鞋」ぶりを尊敬していました。お陰で森鷗外の研究書は吉野さんから全部いただき、それ以外の作品も含めて随分沢山いただいているので恐縮しています。吉野さんの自宅には2つの大書庫があるそうですが、仕事の種類別に4つの書齋がある模様なので、私もせめて2つずつ持ちたいなと思いましたが。

もう一人、後藤新一さんという、三井銀行で常務までやった人が居るんです、最後は愛知学院大学教授。この人とも金融経済研究所で知り合って、お互いにもものを書く、やりとりをしてるんです。いつもお互いに顔を見合わせて、どちらの方が多く書いたのかってようなことを言うんです。この人も厚い本を次々出す。

◆司会 後藤さんは九州出身でしたね。

◆麻島 そうです九州男児。九大でしたね。だから後藤さんとは一種のライバルでした。お互いにそう云っていた。後藤さんが九大から学位を貰う時に、先に取った私にどうするものか聞いてきた記憶があります。吉野さんも後藤さんのことを最良にしていました。だから吉野さんは、後藤さんも「2足の草鞋」組と見て、私と二人を最良してくれたようです。その後藤さんが急死して残念です。

私の「2足の草鞋」の方は、お陰様で何とか続いて、専修大学に移ることで終わりました。自分でもよく持ちこたえたなという感慨があります。相当くたびれたし、若干の犠牲もありましたけれど。

◆質問 奥さんがいろいろ秘書代わりとか、それ以上の有能な人ということ、ちらっとお伺いしてるんですが、何も触れないでよろしいんでしょうか。

◆麻島 いいんじゃないですか、これは私の軌跡ですからね。家族については後で少し出てくるかも知れませんが。

5. 専修大学時代（1977-2000年）

(1) 転職の経緯

◆司会 ここから専修大学時代となりますが、まずは専修大学に移られた経緯をお聞かせ下さい。

◆麻島 専修大学に奉職したのは1977（昭和52）年でしたが、その時私はまだ46歳でした。もちろんその経緯があります。

今まで誰にも話したことがないんですけども、最初は経済学部から誘いがありました。金融論の長幸男さんが、経済学部から東京外語に移るということで、後任探しの問題がありました。私は長さんと学会や研究会で面識がありましたから、ちらっとどうだって言われて「そうです

ね」なんて、私も言ったのかも知れません。そうしたら高橋七五三学部長がわざわざ私の家に「長さんから聞いたけど、来てくれるのか」と確かめにに來られた。高橋先生は今田先生と親友ですから、私も金融経済研究所を通じて知っているし、学会でも面識がある。その学部長がわざわざ來られたんで、どうしようかと迷いました。金融論だったら、私も勉強すればできないことはないと思ったんです。まだその時は課長か次長ぐらいでしたから、もうちょっと「2足の草鞋」が続けられるかなと思うし、企業の中である程度まで上昇しないと分からないこともありますからね。だからまだちょっと早すぎると判断して、申し訳ないけどもうちょっと居させて下さいと丁重に辞退しました。この時行っていれば私は経済学部のメンバーになっていたわけです。あとで土方さんが金融論を担当されました。

それから何年か経ったら、経営史の梅井先生が定年退職されることになった。今度はその後任でどうかということが出てきました。梅井先生が私をマークされたのか、先生から直接勧誘がありましたが、その背後には志村氏が動いていたのじゃないかと想像しています。私自身は金融史をやってきたから、経営史とはちょっと違うけれど、やってできないことはないと思いましたから、まんざらでもなく、考えさせていただくことにしました。確か学士会館で梅井さんと会って話をしました。その時、梅井先生はあなたは学位を持っているし、著書もあるし、非常勤の教歴も長いし、大学院も担当してもらうから、ちょうどいいんだ、ぜひ来てくれないかといわれました。こちらも大分心が動きました。このまま銀行に居れば、支店長ぐらい1回はやらないと役員にはなれないかも知れない、歴代の社長から「君は勉強をその位にしておいて、一つ営業をやってみてくれなきゃ」と、いつも言われていました。かなり親しかった社長からも、「もういいだろう、大学の方も辞めて」とよく言われましたが、「もうちょっと待って下さい」と言い続けて、ついに9年間も非常勤をやりました。それで、いま部長だから、次はどこかの支店長をやらされて、その上で役員云々と聞かされていたものですから、私も梅井先生の勧誘に迷いました。実はオフレコですけれども、もし営業店に出されたら、私もゴルフやらざるを得ない。だからゴルフの会員権まで買って用意はしておいた。しかし私はゴルフをやりませんから一度も使わないままでした。

しかし反面では、これから先、役員になっても大変だなあ、2足の草鞋は履けないな、履けなければどこかで踏み切るしかない、ここで「2足の草鞋」をやめて、大学に行くか、と決意したんですね。大学へ移れば収入激減は覚悟しなければならない。移れば生活はきつくなる可能性がある、ただ時間的余裕は出来て、自分の好きな研究は出来るだろう。妻に移る話をしたら、「それはもう、貴方の思うようにやってください」ということで、全然ノー文句で賛成してくれたんですね。それは恐らく、妻から見ると、これだけ厳しいことをやってるから、そのうち倒れちゃうんじゃないか、もうちょっと長く生きて貰うためには仕方がない、そういう

判断かも知れませんね。それで最終的に決断しました。

今になってみれば、同期の人たちはずっと前に定年になって辞めているし、第2、第3の就職もやって、それも終わっています。現役で70歳まで居るのは、まず民間ではありませんからね。今現役なのは同期で私だけでしょう。確かに専修に移ったら年間の収入は半減しました。最初から教授職で、経歴換算では非常勤の9年間は100%算入、会社時代の調査・審査畑は高率での換算でしたから、それ程の格差はなく、入職後数年で差は解消しましたから、私の場合はよかったです。それでも半減は驚きました。収入より時間を取ったと云うことですね。私は、自分の好きなことが出来るのが最大のメリットだと考えました。企業にいればその時の収入が多くても早く定年が来ますから、もし生涯の総収入で比較すれば、私は大学で70歳まで勤めたから、結構回復しているのかも知れませんね。

◆質問 専修以外からの誘いはありませんでしたか。

◆麻島 この時には、まだなかったですね。定年まで10年ぐらいはありましたから。しかし専修の話が無くても、どっかから声がかかったら、多分行ったでしょうね。そうでないとだんだん追い詰められて、本当に営業の人、会社人間になってしまいますから。辞める話をトップにしましたら慰留されましたが、最初から私は変える積もりはありませんでした。

(2) 転職後最初の教授会の印象

◆質問 大学に移られると、会社生活と違って、いろいろカルチャー・ショックがあったと思いますが。

◆麻島 私は専修大学経営学部経営史担当の教授として入りましたが、最初に強烈な印象がありました。それは、入職した第1回目の教授会で、某教授が学部長に対して「あんたは」という調子で、いろいろと非難的に食ってかかるんです。学部長が一生懸命反論する。「教授会っていうのは、こんなところか」と驚くと同時に、「大学っていうのは、さすがに自由で面白いとこだなあ」という印象を持ちました。後で聞いたら学部によって違うと。ある学部はなんにも議論もしないで、上意下達である、と。ある学部は結構対立があるとか。いろいろと聞いて、経営の場合はいい方だ、自由なんだ、とある意味では安心しました。

もう一つ驚いたのは、教授会に出たら、数学の平野次郎先生が居たことです。私が浦高で数学を習った先生なんです。先生は浦高から東大に移って、東大教授を定年になって専修に来られた。私も専修に来て、偶然に同じ学部で先生と教え子が同僚になっちゃった。なぜこだわるかということ、平野先生は、浦高の時「文科の数学」ということで記号論理学や集合論を教えて下さったが、文甲では数学の嫌いなやつがいっぱいいるし、数学に興味ないですね。しかも、先生はよく風邪を引いて、マスクをしていました。マスクをしたまま授業して黒板に書いたりする、ぼそぼそなんか言ってるけど、全然聞こえないんです。それでも仕方がない、われわれ

は出席だけしてる。その印象しか覚えていない。その先生と教授会で同席するわけで、私は恐る恐る平野先生に言ったんですよ、「私は浦高で教わりましたが、先生はあのころマスクをかけて居られましたね」と。「そうそうあのころは、体弱くてね、しょっちゅう風邪引いてましたよ」というので、「いや先生の声が聞こえなくて」って言ったら、「そりゃそうでしょうね、マスクしてたんだから、聞こえるはずないですね、自分でも分かってましたよ」といわれ、二人で大笑いしました。そのお陰で先生とは雑談するようになりました。

そうしたら、もう一人文学部に、東大でドイツ語を習った小宮曠三先生が来られた。先生も浦高から東大へ行かれましたが、有名な小宮豊隆さんの息子さんで、なかなかの硬骨漢と承知しています。先生にも専修でばったりお会いし、それから時々雑談し、世の中狭いなど思いました。

(3) 学内の活動

(イ) 各種の委員など

◆質問 大学ではいろいろな委員をやられていますね。

◆麻島 そうなんです。経営学部に入職したら、就職指導委員を皮切りにすぐ幾つか委員をやらされ、それが終わったら、今度はカリキュラム委員長をさせられました。亡くなった志村嘉一君がいうには、「麻島さん、カリキュラム委員長っていうのは、学部長に次いで重要な職務なんですよ。米たばかりで、すぐそんなのをやるっていうのは、すごいもんですよ」っておだてられましたね。そういう志村君が、千葉大学に移ったので、金融論に穴が明き、私はカリキュラム委員長だから、穴埋めしなきゃいけない。すぐに外から持ってくるのは間に合わないから、私がやりますということで、金融論を数年間担当しました。その後来られたのが、井上裕さんなんです。志村君がアメリカに招かれ、後輩でまだ若いのに滞在中に急死するなんて夢にも思いませんでした。彼の葬儀で私は学部長の弔辞の代読させられましたが、志村君とも因縁があったわけです。

学内の活動では、各種の委員を一通りやって、多分やってないのは学生部と体育関係ぐらいでないかと思います。経営研究所長も、順番が来てやりました。

(ロ) 社研の所長

◆質問 それから社研の所長もなさっていますね。

◆麻島 社研の所長は私にとってイメージが強い出来事でしたね。1991（平成3）年から94年まで、2期やりました。経済学部の人で、歴代ずっと社研の所長をやっていますから、当然、私とは関係ないことだと思っていたら、ある日突然打診があった。常行さんから「社研の所長やってくださいよ。」「いや、そんなのお断わりだ、あれは経済学部でやるものだから、いやだ。」「そんなことは言わないで、やって下さいよ、絶対皆で支持しますから」と言ってね、いろい

ろうまいこと言われた。私は、「経済の人から、はしごを外されるのは嫌だ」と抵抗したわけです。所長にされても浮き上がって、すぐいやになって止めるなんていうんじゃない。だからやりたくない、と言ったら「それは絶対しないから、信用してぜひやって下さい」という。彼だけでなく、幾人からも言われて、結局断り切れず引き受けた次第です。因みに約束通り「はしご」が外されることはなく、みなさんから支持されたことを感謝しています。

確かに経済学部以外からの所長は初めてですから、社研としては一つの革新なんでしょうね。多くの人が「社研は経済学部」というイメージを持っていたから、全学的な研究所という立場を強調するなら、所長が経済以外から出てもおかしくない。

所長になってから、どう運営するかを考えました。10年間の三輪前所長の時代には、プロジェクトを展開して、何人かに参加してもらって、研究成果をペーパーにして行くというスタイルだった。三輪さんが先頭に立って推進して偉いと思うんですが、何回もやって少し息切れがしていると感じた。ですから三輪方式を踏襲してまた新しいプロジェクトを立ち上げるのは限界だと思ったんで、いったん打ち切ろうと決断しました。その代わりに私に出来そうなことをやりたい。私は歴史畑ですから、ちょうど40年の節目になるので40年史を作ることを考えた。事務局局長の高橋祐吉さんを引っぱり込んで、40年史の企画を立てて提案しました。幸いその提案は全然反対なく通りました。私が持っている社史作りの経験を生かして、やる以上はいいものを作りたい、私自身で執筆も引受け、全部責任を持つという前提で開始しました。内容、構成については高橋さんと相談して原案を作りましたが、高橋さんも分担してよくやってくれました。それまで社研の歴史を編纂したことはなかったから、あの段階でやってよかったと、今でも思っています。

『専修大学社会科学研究所四〇年史』（1993年）は、社研創立のそもそもから始めて、出来るだけ資料を集め検証して、実証性の濃いものを目指しました。いろいろ調べてみると、やはり専修大学の歴史が、あちこち投影されているわけですね。歴代の所長とか学長がどういう人であって、どう社研を見ていたか、どういう役割を社研は負わされて、どう苦しんできたか。過去においては科研費を使って共同研究をやったり、とにかく所員のまとまりがあった、熱意があった。社研の流れを追ってみると、今や規模はうんと膨れたが、まとまりを欠き、かなり拡散した状態になっている。初期のような共同研究の情熱は失われ、マンネリになっている。三輪プロジェクトは共同研究体制の再構築を図ったが息切れになっている。過去から現在までの社研の軌跡が判明しましたから、その反省の上に立って、社研のあり方、今後の方向付けを考えていくわけで、40年史はその材料を提供したと思っています。

それからもう一つは社研のマンネリ化の是正ですね。古い規定をそのまま守って、マンネリな行動をとっていますから、この際古い規定を見直そうと思った。たとえば、研究分野で3部

門制を敷き、部長まで決めているが、部門制はまったく形骸化している。そういうものは止めたかどうかという具合で、規定を全部検討して、新しい規定に作りなおした。現状に合わせ、誰が引き継いでも運営できるように、ルール化しておきたいと思ったからです。また、特別研究助成を発案しました。これは多少業績主義と言われるかも知れないけれど、社研が生きていくためには、多くの予算を貰って、やっぱり活動をしたという証拠が必要なんです。そのためには特別研究助成で厚く助成金を貼りつけて、その代わり成果を本として刊行することを義務づける。そういうことを提案して、まあこれも認められて今動いていますね。

さらに設備のことですが、電動書架を導入しました。これも大学との交渉では結構ぶつぶつ言われたが、頑張って実現しました。社研の奥の方のスペースに電動書架を入れて、それまでの旧態然たる書庫を廃止したわけです。「まあやればできる」という自信を持ちました。

最後に、新しいことは海外調査を実現できたことです。第1回目は韓国であり、第2回目は中国です。韓国の時は、事務局の池本さんが韓国の経団連に相当する組織とコネがあり、その線から工場見学を頼みました。旅行会社の方は溝田さんに世話してもらいました。海外調査の提案が事務局から出た時、大学当局が認めるかなと心配した。社研のメンバーが20人とか30人とか、大挙して同時に海外に行くわけですから、もし飛行機が墜落すれば、社研の壊滅はもちろん、大学も壊滅する可能性がある。民間企業だったら、経営トップは分散して乗りますよ。社長と副社長が別々の飛行機とかね。だから全部いっぺんに行くとすると、大学が「ウン」というかなあ?と思ったから、私が事前に望月学長に説明をして、「どうですか、これで行っても構いませんか?」と聞いた。そうしたら、即座に「ノープロブレム」「ああそうですか? いいですね?」「いいです、どうぞ行ってください。」私の心配は杞憂でした。

◆質問 大学はそのようなリスクなどまったく考えていないのではないですか。

◆麻島 いなくてもいいと云うことですかね。それで実行したわけですが、従来にない新しい企画といえます。海外調査の先例が開けたと満足でした。後の人はやりやすくなったろうと思います。二回目は中国に行きましたが、三輪さんから中国社会科学院に口をきいてもらって実現しましたが、二回とも多くの所員が参加して、海外調査の需要が大きいことを知りました。事務局長の高橋さんには無理を言って、2期ともペアを組みましたが、よくやっていただいて感謝しています。皆さんに支えられて、私自身も社研に多少なりとも貢献できて、所長をやった甲斐があったと喜んでます。

(イ) 大学院経営学研究科長

◆質問 社研の所長の後に大学院の研究科長をなさっていますね。

◆麻島 そうです。ちょうど所長を2期やった後、経営学研究科長を2期やりました。ここでも規定の整備、運営のルール化をやりました。強く主張する人がいると、その時々でやり方が

変わってしまう、蒸し返しの議論をする、ルールが決まっていないからそうになってしまう。こう思ったので、現在の慣行を確認して「申し合わせ事項」としてルール化する。そうすれば誰が科長になっても、ちゃんと運営できる、そう思って実施した。その中には科長3選禁止規定も含めました。経営学部の教授会規定には学部長の3選禁止を提案をして盛り込みました(ある人が5選、10年もやったので)、同じように研究科長も3選禁止規定を入れました。本学では長くやる人がいますが、学内行政は長くやればマンネリになり、権力を持つようになって弊害を生ずるとというのが私の信念です。

それから大学院委員会で「懸案事項」と称するものが、ずいぶんたくさん残っていました。望月学長の時には、大学全体・学部全体での懸案事項というのがずらりと数十項目もあった。大学院でも懸案事項が数十項目もあったんです。それがちっとも解決しないで、むしろ増えていくんですね。委員会で批判したり、提案すると、「それは懸案事項にもう入ってます」というんですね。入っていることと、その解決を図ることが連動していかないわけです。何かいうと、「それじゃあ懸案事項に入れましょう」って入れられて、実質上棚上げになってしまう。懸案事項に入れば済むと云うことではなくて、懸案事項自体をもっと計画的に解決する方向で頑張らなきゃいけないんじゃないですか?ということを書いて小委員会を作り、他の研究科長と一緒に出来るものから一つずつ潰していくことにしました。実際、いくつかの懸案事項はそれで潰しました。それはよかったと思っていますが、非常に大きな問題ほど簡単に解決できないという面があります。おそらく今でも懸案事項はかなり残ったままだと思いますが、どうでしょうか。

(4) 学外活動

(イ) 大蔵省金融制度調査会

◆司会 学内の話はこれぐらいにしますが、先生は政府の審議会など学外でも活躍されていますが、これらについてもご紹介いただければと思います。

◆麻島 まず一つは、大蔵省の金融制度調査会の専門委員。私は第1委員会、館委員会と称しましたが、そこに1985(昭和60)年から90(平成2)年まで属していました。金融制度調査会の歴史は古くて、大正15年から昭和初期までやったし、戦後も何回かやっていて、有名な審議会です。この時の調査会は、金融の自由化に対して金融機関がどう対応するか、金融界をどう編成変えるかという問題でした。それで2つの専門委員会を設けて、金融・財政などの学者、ジャーナリストと、銀行、保険、証券各業界の代表で構成したわけです。ある意味では混成軍でやるわけですけど、私はどうも大蔵官僚とか業界の方からは、「信託の専門家だ」ということで、中立である学者グループとして推薦されたのでしょう、もちろん信託の代弁をする必要はありませんが。委員会での議事に参加していると、やはり業界の自己主張は非常に強かっ

たですね。それぞれの業界の人が執拗に自分の業界の利益を主張するなあという印象を強く受けましたし、まだバブルがはじめてない段階でしたから、特に証券系は威勢がよかったし、興銀も強く主張していましたね。両方とも「もっと業務範囲を拡大したい」ということで、それに対して防御の方に回ってるのは、むしろ信託でしたね。当時、野村証券からは坂巻副社長、日興証券からは幸専務、興銀から西村副頭取が出ていましたが、のちに前の二人は逮捕されたり、辞任していますね。

◆司会 都銀も業務拡大を強硬に主張していましたね。

◆麻島 そうそう、都銀も強く要求していました。そういう中で私が疑問を持ったのは、「みんなが業務範囲を拡大したら、同質化してしまうだろう。それでいいのか？」ということでした。互いに相手の分野に乗り込んで行き、各金融機関の専門性を希薄化しようとする。相互乗り入れすれば、やっぱりメンバーが増える、そこで大いに競争させて効率化を図る、ということ聞かえは良いけども、結局、大きいやつが勝つ、あるいはもっと大きくなる。とすれば結局寡占体制になる。しかし同質化でいい分野と、専門性が尊重されていい分野があるんじゃないかと思った。ですから私はこの相互乗り入れ方式採用という結論には賛成ではありません。私が知っているいくつかの分野、例えば信託の分野では「そう簡単に誰でも信託業務が出来るものではない、専門性は残すべきだ」と主張もしましたけども、誰も同調してくれない。結局、調査会の大勢はやはり相互乗り入れでした。そして「単に垣根を低くする」ということではなくて、子会社方式での相互乗り入れが妥協の産物でした。それならば法律改正もしなくて、認可行政で出来るからです。

大蔵官僚と館委員長たちの合作で筋書きが作られ、その線で決められた。ただ、他の審議会を私がみた限りでは、この審議会はまだ議論が出来た方ですね。全く官僚的に「ト書き」で始まって、すべてがその通りに進行するというものではありませんでした。各業界の利害関係が絡まっているから、自己主張しておかないと損するという雰囲気が強く、そういう意味での活気があった、ということもいえます。

(ロ) 日本学術会議の第15期会員

金融制度調査会の次にやったのが、1991（平成3）年からの3年間、日本学術会議の第15期会員です。これは経営史学会と土地制度史学会、社会経済史学会の3つの学会から2人を会員として出すもので、私は経営史学会と土地制度史学会を代表し、社会経済史学会からは速水さんが出てました。われわれ2人は経済史ですから「第3部」所属。学術会議は7部構成で、3つが文系、4つが理系、だから多数決的になるとだいたい理系の方が勝つんですね。第3部の会合のほか、会員はいずれか2つの委員会のメンバーにならなければいけない。委員会の種類には、常に設置してある常置委員会と、随時目的によって設置される特別委員会とがあり

ます。私は第5常置委員会と、巨大システムと人間特別委員会（巨大な科学におけるリスクをどうするかという理系的な特別委員会）を希望しました。

印象としては、やはり学会会議に出てくる位だから結構年輩の人が多いです。確かに錚々たる連中だな、しかし老人倶楽部だ、と正直そう思いました。そういう人たちが、総会や部会、また委員会でいろいろ議論をする、形式論、手続論も随分聞かされた。そうかと思うと、例えば「尊厳死」の問題とか、政治がらみの問題や、科学技術の関する極めて現代的な問題なんかも出てくる。たとえば、アメリカで巨大なサークル状の設備を作って、その中で素粒子だか飛ばして、物質の究明をするための実験をやっている。その種の設備をもっと大規模に建設するために日本も金を出せと要求してきた。その可否を巡って侃々諤々の大議論、聞いていて面白かったし、これぞ学会会議らしいと感じた。結局、金を出す必要はないという結論になりましたが、まともな学者もいるもんだと安心したことがありました。

私に関係した案件の2、3を挙げますと、第5常置委員会としてのものがあります。その委員会は「もっと公文書を開示しろ」ということを強く主張しました。行政文書はだんだんと公開するようになっていますが、「どれを公開するか」は役人が握ってるんです。だから役人が「都合が悪い」と思ったらその部分は公開しない、つまり全面公開ではないんですね。そういうやり方である限りは、いつまでたっても「秘密のもの」として隠されたままになる。だから大いに議論して、役人の恣意的な判断を排除して全面公開にすべきだと文書で当局に要求しました。今でも地方の公文書館に資料を見に行きますが、いつもこの時の議論を思い出しますね。

もう一つは地裁の判決原本の保存です。「もう保管スペースがないから棄てろ」という法務省の通達が出てきましたが、これには法律学者がもろ手をあげて反対でした。法律畑の委員の問題提起で、第5常置委員会としても反対表明をしようということになりました。たしかに裁判所には判決文が蓄積されて膨大なものになって、保管しきれないから棄てる、でも棄てるのは場所がないからだ、しかし重要な財産だから棄てては困る。「どこかで引き受けりゃいいじゃないか」、「それじゃ引き受け手を捜そう」ということになって、結局いくつかの大学に分散して保管するという方向で、廃棄処分を阻止できた。これはうまく解決できた。主張を聞いてみると、原判決を棄てればさかのぼって調べることが永久に出来なくなり、学問的に困らしいんですね。これは歴史的価値がありそうだし、経済畑でも研究上必要になる可能性がある、と思って私も廃棄反対、保存せよと合唱しました。いったん幾つかの大学に分散して保存したのを、最近、また一箇所に集めて保存する方向になったと聞いています。

歴史資料の保存も随分議論しました。私は第3部ですが、第1部の方にも歴史家がいる（むしろ史学関係で多くいる）ので、合同で行政文書以外にも歴史資料の保存を考えたわけです。それらは全国あちこちに今散在していて、黙っていると無くなる、あるいは棄てられる。それ

をどこかに集めて保存すべきだと提案をしよう。そのためには建物作って、組織を作って数十億円お金がかかるが、そういうことがあってもいいんじゃないかということです。第3部からは私がコミットして、第1部と協力して具体的なプロジェクトまで考えたのですが、結局これはダメでしたね。要するに金がかかるものはダメ。だから学術会議の無力を感じましたね。学術会議の担当は総理府ですが、総理府は弱い役所で、大蔵省に頑張れない。官庁の序列では下なんです。予算獲得の発言力が弱い。だから学術会議で問題提起しても通してくれない。歴史資料で数十億もかけるとはとんでもない話だとなる。学術会議の古参会員がまずそんなものは無理だと水を差す。内容的に関係深い第5常置委員会が協力的でない。それでいて理系の方で何か研究所を作ったり、プロジェクトを出すと通っちゃうんです。こりゃけしからんと思いましたね。だから一種の力関係の実態を見せつけられると、イヤな感じも持ちましたね。

資料保存でもう一つ加えておきたいのは、第5常置委員会に企業資料の保存の希望を出したことです。企業資料協議会という組織がありまして、私も長く理事ということでしたが、花村仁八郎さんが会長（死後、後藤新一さん）、中川敬一郎先生が副会長、日本経営史研究所が事務局ということです。企業の社史編纂経験者、これから作る人を会員にしていますが、企業の資料管理・保存も活動範囲に含まれています。私も社史編纂に関係してきて、経営史学者として企業資料にも歴史的価値を認めておりますから、折角集めた企業資料をいかに保存するかに関心があります。そこで第5常置委員会に企業資料の保存状況、保存の必要を認識して貰い、何か手懸かりが付けられないかと思ったわけです。企業資料協議会の幹部2人に委員会に来て貰い、現状説明、そして私から援護射撃をしました。

企業は保管場所がないことを理由に、社史編纂で集めた資料を棄ててしまうことが多いのですが、どこか山の中でもいいから倉庫を造って企業資料を受け入れたらいいな、というのが私の主張です。行政文書、一般歴史資料だけでなく、企業資料も保存の対象として考えるべきだ、というのですが、企業資料までは到底手が及ばない、聞き置くだけというのが委員会の雰囲気でした。

㊦ 文部省教科用図書検定調査審議会

◆麻島 さて、それから現在の対外活動としては、文部省の教科用図書検定調査審議会で副会長兼価格分科会長を何年もやっています。この審議会には、いわゆる教科書検定の分科会と、教科書の価格を審議する分科会とがあります。高校用は有償ですが、小学校・中学校は無償交付で、その予算は数百億円なのです。毎年その値段をどうするか？というのが価格分科会の仕事で、毎年12月の予算編成に合わせて、何%引き上げるべきだと私の名前で文部大臣に建議するわけです。その通り決まって新聞に小さく報道されますが、事前に文部省が大蔵省と折衝して内々数字を固めておきますから、予め結論は出ている。それを審議して、一応もってもら

しく建議するという形にしていますが、これは審議会のイヤな面ですね。ただ、価格計算システムがマンネリ化して、いろいろ矛盾を生じている。それを指摘するが、面倒なものですからなかなか手を着けない。私は制度疲労の対策をとるべきだと言いつつ続けてきましたが、やっと昨年からは役人も神興を上げて、外部に委託して検討することになりました。

そうしたら2001年1月の省庁再編でこの審議会も縮小、検定部門だけ残して、価格分科会は消滅する、私はやっとお役御免になります。私も審議会に幾つか出ましたが、あまりほめられたもんじゃないですね。「もっと実質的にやるべきだ」という気が依然としてします。

(5) 研究活動

◆司会 大学時代の話となると、これまでのように「雑用」というか大学行政の話になりがちですが、本業の一つというべき研究活動についてお伺いしたいと思います。先生の研究は社会人時代からの継続という面もありますが、これまでの銀行・信託を中心としていた研究から財閥史の研究へと変化したようにみえます。まず、ここらからお話していただければと思います。

◆麻島 私自身では「変化」したのではなく、「拡大」と思っています。銀行・信託分野の研究を止めたわけではない。財閥史などが増えているという認識です。

(イ) 財閥史研究

ご承知の通り私は経営史を担当していますが、その中で財閥史の研究はかなり力を入れてやってきた分野です。それで先ほど申し上げたように、専修大学に転職をした時には経営史が担当ですから、転職が決まってから大急ぎで経営史の勉強を開始しました。経営史のそれまでの文献を、片っ端から読まなければいけないし、それで講義の準備をしなければいけない。それで入職の4月までに一生懸命講義案を作ったわけですけど、とうとう完成しませんでした。間に合わなかった。だから後は走りながら講義を完成していくというやり方をしました。その間に大急ぎではありますけれども、ずいぶん経営史の先行研究に目を通したので、自分では随分「勉強になったなあ」という記憶があります。

授業のための勉強だけでなく、やっぱり経営史をやるためには目先のテーマ設定しなければと思いました。経営史畑と云っても、経営学から経営史に入ってきた人もいれば、経済史から入ってきた人もいます、しかも企業の持ついろんな側面を照射すれば、いろんな研究がありうるわけです。私にまず浮かんだのは住友でした。やっぱり住友系の企業にいたので住友財閥のことはある程度知っている。もう一つは『五十年史』を執筆した時、住友修史室にあった「実際報告書」使わせてもらって、そのコピーが残っていました。この実際報告書は内部資料で、従来は門外不出でしたが、これを使えば書けると判断した。従来、三井や三菱と比べると「資料の限界」ということで住友の研究は遅れていましたね。「じゃあ一つ住友をやろうか」ということで、住友財閥史に対象を絞りで、大急ぎで住友の研究に取りかかったという次

第です。

そうしたらですね、大学というのは私から言わせると随分楽なところでした。つまり時間は結構ある。だからどんどん論文が書ける。書かない人は一体何をしているんだろうと思いましたね。書いて作品を次々と発表するが、「2足の草鞋」時代のことを思うと大違いに楽でした。住友の論文がどんどん貯まって、7本ぐらい書きましたかね、そこで『戦間期住友財閥経営史』（東京大学出版会、1983年）にまとめました。

実は、専修大学に移る時に、加藤俊彦先生も東大社研を定年で辞められて、同時に専修大学商学部に移られたんです。熊野さんも同時に来られましたが、私は専修大学に来てから初めて会ったんです。入職前のある時、加藤先生と東大で会って帰りがけに、先生は私に忠告を下された。それは何かというと、「君は今までずーと信託をやってきたが、これからは信託だけじゃなくて範囲を広げた方がいいですよ」。もう一つは「一つのテーマで自分は今まで10年刻みでやってきた。だけどまあだんだんと歳を取って来たし、これから5年刻み、あるいは3年刻みでやることにする。君もそうしたらいい」という忠告でした。これは先生をお送りしたタクシーの中での話です。先生ご本人は私への忠告を忘れたそうですが、私の方は「いいこと言ってくださった。それじゃあもっと範囲を広げようか」と自分なりに受け止めました。

それで経営史担当だから経営史をやるのは当然ですが、経営史の中でももっといろんなものをやる。金融史もやってもいいだろうと。ただ経営史となると、私はずいぶん遅い新規参入なんです。若い時から経営史・経済史をやっている人が多いわけだから、そういう中で私は遅い参入者として何か特色を出さねばならないと思った。私は住友財閥経営史をターゲットにして、二つの特色を考えました。

一つは今言った住友の内部資料の実際報告書を使って、住友各企業の内容について、ファクトファイディングするわけですね。これは内部資料だけあって、従来の営業報告書とか外部資料ではなかったことがかなりわかる。そういうことで住友財閥の戦前における実態が相当にクローズアップできるだろうと。

それから、もう一つ考えたのは資金運用の解明です。収支構造分析と私は名付けていますが、要するに企業分析のテクニックを住友に適用してみようということですね。それは何かというと、企業のバランスシートを何期も並べてみて増減を計算して資金運用表を作ることです。どういう資産の取得は何を財源としているのかをバランスシートから逆算し推定する。従来の研究水準は、バランスシートを分析してみたり、あるいは損益をみて「儲かった・儲かっていない」ぐらいしか考察していないんですが、私のはそれをもっと資金の動きまで下ろしていこうという考え方です。資金運用表は私が銀行の調査にいた時に随分使っているわけですね。現実の企業は資金運用表があって月なり週なり、あるいは半年なり、長期なら何年間なりと、資金

の計画・実績をみている。カネの動きは資金繰表と呼ばれ、現実の企業は必ず作っている。企業を歴史分析する場合、それが残っていれば一番いいんですが、それはまさに内部資料ですから、外部からは絶対見られない。企業の資金繰表を望むのは無い物ねだりになる。だったらそれに代わるものはないか？ そこでバランスシートの残高から逆算して大まかな資金の流れを掴もう。これを歴史分析に応用しようというのが私の考えです。

ところが実際にバランスシートから逆算して作ってみると、計算が簡単には合わないんです、普通は。そこには若干のノウハウがあって、利益処分とか損益的な問題について、会計的に考慮して修正しないと運用表は完結しないんです。だからある程度の会計知識がないとこの表は作れない。私は幸か不幸かそういうことを過去にやっていたから、歴史分析に応用することが可能だったと思います。だから『戦間期住友財閥経営史』という本は、実際報告書を使い、収支構造分析を施して、ある程度の目玉を織り込んで、住友財閥の実態を初めて解明したことになります。これが1983年ですが、返す刀で「じゃあ三菱も同じようにやってみよう」と分析しました。それが『三菱財閥の金融構造』（御茶の水書房、1986年）ですが、そこでは収支構造分析の適用が大きいなねらいで、かつ三菱財閥の統括組織、本社はどのような組織・方法で三菱全企業を統括したのかも考察しました。

その前から財閥史研究会というのがありまして、そこでは我々ぐらいから若い人までいろんな財閥を手掛けている人が集まって研究会をやっていました。それに私も出て、多くの人と知り合いました。それぞれの人が自分の研究をそこで報告するし、議論をする。もちろん私は住友財閥研究の立場で出ていたわけですが、そこで知り合った大塩武、宇田川勝、春日豊、斉藤憲の諸君が私の趣旨に賛成してくれて、共同研究を組みました。収支構造分析を中に織り込むという形でやって、総合財閥の三井・三菱・住友と新興コンツェルンの日産・日窒・理研とを対象にして、『財閥金融構造の比較研究』（御茶の水書房、1987年）という本を最終的には出しました。

ところで新興コンツェルンの中で未開拓分野がありまして、通常云われる5つは日本窒素、日産、理研、日本曹達、森ですが、日本窒素は大塩さん、日産は宇田川さん、理研は斉藤さん、日本曹達は下谷政弘さんが代表的研究者ということになっている。残った森、つまり現在の昭和電工は誰もやっていない。そこでこれに着目して研究することを考えた。私は銀行時代に昭和電工を随分調査して、よく知っている人がいるので、そこに声をかけて資料保存関係者に紹介して貰い、倉庫に出向いて内部資料をやっと入手することができました。知己の大塩・斉藤両君と私の3人で共同研究を組み、斉藤さんは都合が悪くなったので、結局、大塩さんと二人で『昭和電工成立史の研究』（日本経済評論社、1997年）を書きました。これで新興コンツェルンの5つが出揃うことになりましたが、まだ成立史の研究ですから、また大塩さんと二人で

戦後の昭和電工を続編として書こうといているところですよ。

こうして財閥史の中で、私は住友、三菱、森と順番にやって来たんですけど、三井が入っていない。ところが三井海上の75年史を手掛けることになりました。これについては後で触れることにします。三井海上の75年史の時、「三井物産の保険部門」という論文を書きましたが、三井海上の親会社というのは三井物産でして、今の私は三井物産の研究に向かっています。現在、戦前期の三井物産の機械取引を分析したのですが、これも三井物産研究の一環になるわけです。これには経緯があります。国立アメリカ公文書館に三井物産の資料があることが伝わってきたので、1998年7月に藤田幸敏・大島久幸君と一緒にワシントンに行きました。現地では段ボール箱からいろんな資料を出しては点検し一生懸命物産資料を探したわけです。その資料の中に三井物産の機械取引についての資料もあって、最近それを大急ぎで分析したのが『戦前期三井物産の機械取引』となって2001年3月に出版することにしました。このように財閥史では、住友、三菱、昭和電工、三井物産という順番で研究を展開してきました。

◆質問 個人的関心になるのですが、先生のように財閥の研究をされていると、戦後の「企業集団」と戦前の「財閥」との関係が気になります。先生は非常に禁欲的で、資料的裏付けのある学問的実証を重視され、戦後の問題については発言を控えられているように思えます。この点が私には大変不満で、企業集団などについて何か研究上の示唆をいただければと思うのですが。

◆麻島 私も戦前の「財閥」と戦後の「企業集団」の関係を断絶とみるのか、連続とみるのかに関心を持っていますが、戦前の研究すら完結していないのに、いい加減な発言をする気持にはなれません。戦時中の財閥の行動、戦後の財閥解体、復興期の再建整備と企業集団としての再編成を逐次証明して行かねばと思っています。戦時体制期について首を突っ込みつつありますが、まだまだの段階です。高度成長期には私自身住友系企業の中にいて、住友系各企業の行動を見聞した経験があり、表面的にいわれている企業集団論では物足りない感じを持っています。そこには伝統的な親近感を同系企業に抱き、共同行為を当然視する精神構造があり、反面、財閥本社による絶対的な統轄がないため、各企業は相対的自由を持ち、企業成長によって企業集団内における発言力増大を図ろうとする傾向がある。そういう企業集団内部の実証的考察が必要だと思います。

◆司会 これは大島さんに是非引き継いで欲しいと思います。

◆麻島 私の持ち時間がどれだけあるか分かりませんが、まだ財閥史研究を止めたわけではありません。財閥史でもまだ、書き足りないところがいくつもあります。住友財閥でもっと個別企業別にやりたい気持ちがあるんです。だから早く財閥史を再開したいという気持ちの反面、目先の課題を先にやらなきゃいけない、多角経営になってしまった現状を何とか収束して、早く

楽になりたいという心境です。

(ロ) 金融立法史・信託業史など

◆質問 財閥史研究についてもっと伺いたいこともありますが、時間の制約もありますので話を先に進めさせていただきます。財閥史以外の分野での研究はいかがでしたか。

◆麻島 他方、財閥史以外を挙げますと、ひとつは拜司静夫先生・渋谷隆一さんらと日本金融立法史研究会をやりました。どういうものかという、日本の金融機関にはそれを規定する根拠法がある、たとえば銀行なら銀行法、信託会社なら信託業法、保険会社には保険業法があるというように、それぞれの金融分野で営業法があるわけです。ではいったいそういう法律はいつから立法されたのか、立法時にはいろんな利害関係が錯綜していて、その中の力関係である立法内容が決まってくる。立法は単なる法律だけの問題ではなくて、経済的ないろんな利害関係が反映していて、構想、草案の段階から最終案に至るまでずいぶんと変化しています。だから金融立法史とは経済と法律にまたがった学際的研究分野と云うもので、未開拓だからやってみようという発想で立ち上げました。ところが金融機関を分担してやっている中で、参加者それぞれ人の進展状況も違うため、結局、途中で分解して、渋谷さんたちは『明治期日本特殊金融立法史』を何人かで書き、私は独自に『日本信託業立法史の研究』（金融財政事情研究会、1980年）を出しました。今でもこの発想はユニークだといえましょう。

私の『日本信託業立法史の研究』は、この研究会の発想に沿って書いた論文の集成ですが、明治期の日本興業銀行法の信託条項から始まって、明治38年の担保付社債信託法、大正11年の信託法・信託業法、昭和18年の兼営法、26年の証券投資信託法、27年の貸付信託法を軸に、立法の構想、草案の変化、制定後の改正まで丁寧に分析したつもりです。だから信託に関しては明治から現代までの信託立法は網羅していますね。

次に加藤俊彦先生を中心にして、日本金融論研究会もやっています。科研費をもらって「日本金融論の学説史的研究——金融機関を中心として」というテーマでやったんですが、この時は加藤先生を代表者、渋谷、石井、伊牟田・私の4人が幹事、事務局は私が担当で運営しました。その結果が加藤俊彦編『日本金融論の史的研究』（東大出版会、1983年）です。幹事で書かない人が出ましたが、なんとか最後は大きな本にまとめることができました。私の分担は信託会社と無尽会社でした。

◆麻島 それから信託業史の研究は大学へ移ってからも続いております。私の信託業史研究の中には地方信託会社を分析するシリーズがありまして、調べてみましたら21本になっています。これは各信託会社が立地した場所に行って、県立図書館で地元新聞の記事や、郷土資料も蒐集して、一社ずつ分析しました。大体1つの県で1つの信託会社しかありませんから、そういうものを片っ端から分析していくということをやりました。北は青森から、南は長崎まで、信託

会社の存在した県はすべて行きました。

これはまあ余談ですけれども、私の家庭サービスは不十分なものですから、銀行時代は年に1回くらいしか家族を連れて旅行に行けない。だから娘たちにも旅行に行けない不満もあるだろうと思って、ある地方へ行く時は上の娘、ある地方は下の娘を連れて行く。行った先で複写を手伝ってもらって、1日くらいは観光して、これを旅行代わりと称していました。フィールドワークをやっている父親の背中を子供が見て、何かを感じるだろうと期待もありましたが、結局、背中を見て貰ったけれど二人とも学者にはなってくれなかった。

これらの地方信託シリーズもそのうちまとめて、本にしようかと思っていますが、まだそれ以外にいくつか補助金をもらってやった仕事があります。㈱トラス60からの補助金では金銭信託以外の信託業務の実証研究をやった。それが『戦前期信託会社の諸業務』（日本経済評論社、1995年）になっていますし、2、3年前には台湾へ行って資料を集め、この時にも藤田・大島両君を連れてでしたが、日本の植民地時代の台湾信託業について論文を2本書きました。このシリーズでは、朝鮮信託業と満州信託業まで書いて、私の植民地信託業は終わりです。後残るのは財閥系の大信託を分析することで、そこまでやれば私の信託業史研究は縦糸と横糸が全部織り上がって完結する。それまでは簡単に死ねないな、ということになるわけです。

ｲ) 社史の監修・執筆

◆質問 社史のお仕事も沢山なさっていますが、いかがでしたか。

◆麻島 最後に残っているのは、社史についてですね。経営史をやっている私にとって社史は重要な関心事です。経営史研究や教育のためによく社史を使うし、経営史学者として動員されて社史を書くということも結構あるわけです。

実は私にとって社史との出会いは大変古く、1957年に「戦後刊行の銀行史について」と題して学界動向を書いているんです。銀行に入って4年目ですが、前に登場した川村先輩から『史学雑誌』に書いてみないかと勧められて、「何を書きますかね?」「まあ銀行にいるんだから、銀行史なんかどうか」ということでやりました。戦後たくさん出た銀行史を片っ端から読んで批評しました。一種の一括書評みたいなことをやった。これが社史との出会いの最初でした。今読んでみると若い時にはよく勉強したなと思いますね。

それから後で、さっきお話したように『住友信託銀行五十年史』を自分で書きましたし、『滋賀銀行五十年史』の監修を頼まれたり、さらに『朝日生命百年史』の監修指導をやりました。私の場合、大日本印刷の社史部門からの依頼が多いのですが、自分の社史編纂経験を生かし、朝日生命の時も大変いい結果に終わりました。というのは高島社長が全面的に任してくれたし、編纂室も熱心で協力的で良かった。その代わり何十回もレクチャーをし、原稿を加筆修正して、出来上がったのは大変アカデミックな社史になりました。本編だけで2000頁、資料編

が1300頁の大冊ですが、これも優秀会社史賞を貰い、やった甲斐がありました。生保業界のことになると、大蔵省が会社に聞いてくるそうですが、折角やるなら会社内のことだけでなく、行政との関わり、ライバルとの関係も含めて考察する、というのが私の考え方です。

この朝日生命をやっている時に、ちょうど国内留学の機会が来ましたので、東大の石井寛治さんのところに籍を置かしてもらって、監修をやりながら何本か生保の論文を書きました。生保の資金運用に絞って生保12社を分析して、それを『本邦生保資金運用史』（日本経済評論社、1991年）にまとめました。結果的には、これが一年間の国内留学の成果ですが、反面で私は後悔しています。折角の国内留学だから、もっと別な使い方、いろいろとエンジョイすればよかったのに、終わってみたら本一冊残っただけかと。しかし本文だけで1091頁の厚い本で、定価が18000円。厚くなりそうな時、社長が「でもやっぱり必要なんでしょう？」っていうから、「必要です」、「じゃあ、しょうがありません、やりましょう」って言ってやってくれたんです。まあ普通だったらやってくれないですね。出版社が無理な頼みをよく聞いてくれたものだと感謝しています。失礼ながら栗原社長という人は今の出版界で良心的な傑物ですね。これが私の還暦記念パーティの時におみやげとして皆さんに差し上げたものです。

その次に『三井海上火災保険七十五年史』の監修と執筆をしましたが、これには本当に不愉快な思いをしました。日本経営史研究所からの依頼でしたが、一生懸命やったから実証的な内容のいい社史になるはずだったんです。しかし完成近くに編纂室長が交替して、後任者が本当にサラリーマン根性の人で、営業上の秘密、親会社だった三井物産への気兼ねでしょうか、内容に対して「これは書かないでくれ、ぜひこれはカットしてくれ」といろいろ注文をつけるんです。とうとう私も頭に来て、社長に直談判して「同業他社は皆書いていることですよ」、といっても、この後任社長は編纂室長と共に「絶対に困る」の一点張り。実は前任社長に私は自分の方針を説明して承認を受け、「何を書いてもいい」という言質をもらっていましたがからね。だから安心してどんどん書いたら、ダメだという、私も怒って遂に喧嘩別れになりました。ですから、戦前の部分は私たち執筆者の名前を出していますが、「書いてもらっては困る」と争ったところは会社が勝手にカットしたり、書き直し、会社の名前になっています。間に入った日本経営史研究所も対処に苦労されたはずですが。親会社であり、同系である三井物産との取引関係に触れないわけに行かないし、東京海上でも、住友海上でも同系との関係はちゃんと説明してある、なぜ三井海上だけがダメなのかといっても、「我が社の方針だ」というだけ、三井物産自体が秘密主義なんですね。だから三井物産を調べるには、三井文庫の資料に頼るほかはない。さっき言った「三井物産の機械取引」も、日本では見られず、皮肉にもアメリカに保存されたものから分析できた。三井物産のアメリカにおける支店が、占領中に接収されたでしょう、その文書なんです。だから恐らく今度私が書いた『戦前期三井物産の機械取引』は、日本の資

料では絶対書けなかったものでしょうね。先輩・同輩の経営史学者が三井物産関係で苦労したことを、私も別な形で体験させられたわけです。

そのあとでやった『帝国データバンク百年史』の監修指導の場合は、社長も編纂室も本当によく理解し、協力してくれましたから、気持ちよく全力投球でき、いい社史が出来たと自負しています。経営史の研究や経営史の授業でも社史を使いますから、我々はちゃんと客観的に、そして実証的にいい社史をつかって、後世に残すべきです。会社にとってもそういう社史を作るのが企業の社会的責任であるし、会社が高く評価されることにつながるはずです。多額の時間とコストをかけながら、つまらない社史を出すのは実に愚劣なことですね。そして会社の依頼に対して、われわれの考え方を認めて貰う努力をする必要がある、と思うのは今でも変わりません。

(二) 学界動向・文献目録

◆麻島 ついでに学界動向や文献目録のことに触れておきたいと思います。私は論文とか本を書くだけでなく、研究者は学界動向を書いたり、文献目録をそれぞれの分野で自分で作るべきだと思っています。

学会動向の一つの変形が、経営史学に載せましたけれども、一括書評です。たとえば地方銀行なら地方銀行を洗いざらい社史を並べて考察し、論評する。同じように相互銀行史とか生命保険会社史とかやりました。昔は書評に値する社史を個別に『経営史学』で取り上げていましたが、発行数が多くて出来なくなった。それならば個別でなく、業界を一括してやったらいいじゃないかと考えて、経営史学会の編集委員長をやっている時に提案して、自分で実践したわけです。『経営史学』でも実現したし、学会創立30周年記念で作られた『日本会社史研究総覧』がこの方式を踏襲してくれて、よかったと思います。この形に限らず、やはり自分の分野については、研究成果をサーベイしなくちゃいけない。それを発表することによって、他の研究者にも役立つ。それは専門家の目でサーベイするからこそ価値がある。

文献目録も同様です。一つだけ余談なんですけれども、私はサラリーマン時代に『本邦信託文献総目録』を戦前と戦後で2冊作りました。文献の現物に自分であたって、所蔵場所と分量まで表示した。逆にいえば所蔵場所を表示するには現物を確認しなければ出来ない。よく文献目録を見て探そうとしても、どこへ行けばあるのか、また、文献名は分かったがどこにも現物がないという経験をしましたが、それでは目録として不十分だと考えた。それならば全部現物を確認しておこう。ついでにどの程度の分量かを表示すれば、あらかじめ目処が付けられる。新聞記事や雑誌記事まで信託に関するものは網羅したので、大変な作業量になりました。調査部にいた時に、昼休みを使って近くにある銀行図書館へ行く、土曜の午後に国会図書館や大学図書館へ行く。東京にないものを神戸大学や大阪市立大学まで休暇を取って見に行きました。

不要になった名刺の裏に文献名を書き込んで、カードとして使いました。転勤者が多いから不要になった名刺が沢山発生するんですね。それを貰い集めて、何千枚かのカードを作り、それを編集しました。家族を動員しての、まさに家内作業も頼みました。

そういう中で国会図書館にも現物を調べに行った時のことです。あそこは特別許可がないと書庫に入れてくれない。そこに勤務している友人に頼んで、特別許可を貰って中へ入ったわけですが、ある土曜日の午後、銀行が終わってから行きました。いつものように書庫に入って現物照合していて、気がついたら入ってきた扉がしまっていて出られない。時計を見たら確かにもう時間が終わっている。書庫内の何階かある階段を上がり下がりして出口を探したが皆閉まっている。さすがにゾーッとしましたね。月曜までこのまま出られないのか、と書庫の中の階段に座っていました。どのくらい時間が経ったのか、扉が向こうから開いて人が入ってきて、「だれかいますか」というわけです。なぜ分かったかということ、中へ入る時にカードを出しますが、それがいつまで経っても消えない、これはおかしいというわけで、係員が念のために探しにきてくれたんです。それでやっと救出された。月曜までいたら新聞沙汰かも知れませんね。やれやれということです（笑）。これも私の執念みたいなもので、国会図書館しかないものはそこで現物にあたるという姿勢ですが、こういうおまけがありました。

6. 全体を回顧して — 研究者として

◆司会 時間もなくなって来ましたので、最後に先生のこれまでの研究人生をまとめて語っていただければと思います。

◆麻島 それでは全体を回顧して、勝手なことを言わせてもらいます。

一つは私の半世紀は、前半と後半に分かれると思うんです。前半が銀行在職24年間、これはサラリーマン時代。そこでは「二足の草鞋」をずーと履いていたわけですが、後半は専修大学在職24年間、これは教員時代。ここでは教育と研究に専念できた時代。正確には若干の公職とか学内行政もやりましたから「専念」ではないかも知れませんが。とにかく24年づつで丁度半々です。考えてみると、前半というのも私にとっては無駄ではなかった。前半の研究が後半につながっている。前半での経験や研究姿勢は後半でも役立っている。むしろ純粹培養で学者となった人とは、違った持味があるのだらうと自分でも思います。

企業から大学に来た人の中に、前職をひけらかすような人がいましたけれども、私は学者として生きていく以上は、やはり研究業績で勝負するのであって、前職でいかに偉かったかは関係ないことだと。だから私は前職のことについては学内では触れませんが、また触れて貰いたくないという態度をとってきました。純粹培養の学者に対抗して研究成果を積むこと、その積んだ重みが自分の自信になっていくのだらうと考えて行動しました。大学というところは、研究

実績が重視される社会のはずであると。だから行政職にのめり込んだり、自分の趣味をやっているだけじゃいけないはずだ、業績を積まない者は馬鹿にされる、逆に業績を充分持っていれば、堂々と発言できる。そう思ってやってきたので、研究業績だけはいつの間にか非常に多くなりました。もっとも質の問題もありますが。

2番目に感ずることですが、私が最初から学者の道で行けば、それなりに別な生き方があったと思うんですが、最初に云ったように貧乏の家ですから、大学に残って研究者になる条件はなかった。そのために就職したわけですが、それが住友信託銀行であったという偶然が、信託業史に取り組むことになり、住友財閥を軸に財閥史の方に参入することにつながっています。考えてみると、50年の前半期が後半期を規定し、自分の研究分野が形成されていったように思えます。

それから3番目には、加藤先生の忠告を重要なものとして受け止めたのはよかったと思います。信託だけを研究していれば、信託の専門家だけに終わったでしょうが、大学に転じたこともバネになって、研究分野を随分と拡大しました。加藤先生の云う通り、学者としては広い知見を持ったり、いろんな課題に対応できることが必要なんだと自分なりに納得しています。その結果、私は多角経営になってしまって、信託業史と地方金融史と財閥史とそれ以外という4つの分野を使い分けるということになったんです。還暦のパーティで言ったんですけど、私は4本のルールで走っていて、ある時はこのルール、別な時はまた別なルールで走っている、最後に4本のルールが1本に集合できるかどうか分かりません、なんていいましたが。今後どう締めくくりますかね。

最後に、4番目ですが、私の特徴はこつこつと時間を掛けて実証分析をやるタイプだと自分でも思っている。だから壮大な理論を構築して、大向こうを唸らせるとか、小器用にアイデアをどんどん出して時流に乗って行くということは、得意ではないし、また生き方としてそういうことに興味がない。長期間にわたって実証研究を積み上げて行けば、その総量がやっぱり大きな力になるのではないか。そうすれば短期勝負の人には、真似ができない優位性が生まれてくるだろうというのが私の考え方です。もし私の研究成果が多少でも評価されるとすれば、積み上げた総量で勝負をする、多くのファクトファインディングをする、それが捨て石になって誰かの役に立つ、学問の前進にどこかで役に立てば嬉しい、こういう感想を持ちます。

どうも長時間にわたり聞いていただき有り難うございました。

1. 単著

『日本信託業発展史』有斐閣、1969年10月

『日本信託業立法史の研究』金融財政事情研究会、1980年8月

『戦間期住友財閥経営史』東京大学出版会、1983年10月
『三菱財閥の金融構造』御茶の水書房、1986年5月
『本邦生保資金運用史』日本経済評論社、1991年12月
『戦前期信託会社の諸業務』日本経済評論社、1995年6月
『本邦信託会社の史的研究』日本経済評論社、2001年3月
『戦前期三井物産の機械取引』日本経済評論社、2001年3月

2. 共著・編著

『財閥金融構造の比較研究』（編著）御茶の水書房、1987年2月
『昭和電工成立史の研究』（大塩武と共著）日本経済評論社、1997年6月

専修大学生田1号館麻島研究室に於いて

聞き手：経営学部 小林襄治所員

同 溝田誠吾所員

高千穂商科大学

大島久幸所外研究員

2000年11月9日

〈編集後記〉

学年末・入学試験、そして卒業式、諸々の仕事・行事の山、それでもいつも春休みは「休み」として過ぎていきます。4月新学期が見え隠れするなかで、気を取り直して前を見据えようとしている今日この頃です。

さて、麻島先生の「私の半世紀の記録」、しっかりと受け止めねばならないものとして読ませていただきました。研究者としての姿勢の重要性、モットメイスベンであります。（KH）

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 古川 純

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
